

細心大胆

—自分史に代えて—

木田晴康

目次

まえがき	1
第一部 四国新聞「こだま」欄への投稿文	2
第二部 大学に関係した投稿文	18
第三部 放送大学のサークルや同好会への投稿文	39
第四部 その他随筆など	75
あとがき	82

まえがき

この度、喜寿を迎えたのをきっかけに、過去に書き溜めた文章を小冊子にまとめてみたいと思った。

自分史の書き方の本を数冊、図書館で借りて読むと、①自分の誕生から今日までの半世紀を年代別に綴ったものや、②今までに体験した出来事・思い出を書くもの、③その他の自由記（エッセイ）のようなものと三つに分類できるようなものである。もちろん①②③の全てを記述したものもある。筆者はどちらかと言えば③に近いものと思う。

自分史は、自分の為に記述したものであり、もとより、他人に読んでもらうことは想定していない。

日経新聞が連載している「私の履歴書」のような著名人の作なら別だが、筆者のような市井の人間に興味を持つ人は皆無だからである。

とはいえ、せっかく作成した文章だから、せめて家族・親族には一読して欲しいと思う。特に、二人しかいない孫たちには数年後に読んで欲しいものである。

令和六年十二月

木田 晴康

第一部 四国新聞「こだま」欄への投稿文

- ① 4月に起こった重大事故に思う（2012年5月21日）……………3
- ② 家族葬について考える（2014年2月10日）……………4
- ③ 詐欺被害ゼロへ思い切った対策を（2015年2月2日）……………5
- ④ 安全、快適な琴電を（2016年3月21日）……………6
- ⑤ 過労自殺を繰り返すな（2016年11月28日）……………7
- ⑥ 大原孫三郎に学ぶ（2018年9月17日）……………8
- ⑦ 新型コロナ対策「基金」の創設を（2020年5月4日）……………9
- ⑧ 沈没事故、児童らを賞賛（2020年12月21日）……………10
- ⑨ 子どもは親のものではない（2021年5月24日）……………11
- ⑩ 子ども命を守れ！（2021年9月20日）……………12
- ⑪ 数学嫌いの人がなぜ多いのか（2022年4月18日）……………13
- ⑫ 「ロシアについて」を読んで（2022年9月19日）……………14
- ⑬ 映画「八甲田山」を観て（2023年3月6日）……………15
- ⑭ 映画「福田村事件」を観て（2023年10月9日）……………16
- ⑮ 「国際連合―その光と影―」を読んで（2024年6月3日）……………17

4月に起こった重大事故に思う

4月のわずか1カ月の間に、3件もの重大事故が発生した。

①京都祇園で青信号の歩行者の列に、てんかんの持病のある青年が軽ワゴン車で突入して大惨事となった。青年は医者から運転禁止を言われていたにもかかわらず運転を続けていた。さらに、病気を申告せずに免許の更新をしていた。

②京都亀岡で登校中の児童と保護者の列に無免許の未成年者が軽乗用車で後ろから突っ込んで大事故となった。運転者は2年前にもバイクの無免許運転で摘発されており、元暴走族グループで一晩中運転した結果の居眠りが原因であった。

③群馬県の関越自動車道で高速バスが防音壁に衝突、大破し多数の死傷者が出た。バス運転手の「居眠り」が事故原因であった。今

回の夜行高速運転は一人の運転手であったが、法令違反ではないと言う。しかし、このバスの運行会社は4年前、当局の監査で業務管理記録の不備により、運行停止処分を受けている。

以上の三大交通事故から共通して言えることは、いずれも「法令違反の繰り返し」と「他人の命の軽視」である。してはいけないこととしなければいけないこと、人間として最低守らなければならぬことを平気で破っていることである。

しかも、同じ違反を何度も繰り返し犯していることである。事故の当事者が一番責任を糾弾されることは言うまでもないが、周囲が絶対に違反を許さない社会こそが同様の事故の再発を防ぐ方策ではないだろうか。

(2012年5月21日)

家族葬について考える

最近、家族を中心にごく親しい人だけでお見送りする家族葬が増える傾向にある。家族葬は葬儀費用も含め、煩わしさを避け、できるだけ小規模に抑えたいと思う家族の本音が見えてくる。

家族葬など葬儀の規模が小さくなっている背景には、長びく不況や急速な高齢化や核家族化で、地縁、血縁が受け継がれなくなったことにある。子や孫の世代が喪主になると「あちこち知らせてはかえって迷惑になる」として他人には知らせない傾向にある。

しかし「人生最後で最大の舞台」を見送ることで、故人にとっては、あの世への旅立ちがスムーズにできるのではないだろうか。故人自身が望むなら別だが、そうでない以上は喪主はじめ、家族は生前の交友関係者には知らせるべきだと思う。

核家族化で別居の世帯が一般的になりつつある現代、故人の詳細な交友関係を知ることが困難だ。そこで、生前親しかった個人や関係のあった団体などの代表者の連絡先などを記録して、事前に家族に周知しておけば、解決できると思う。

(2014年2月10日)

詐欺被害ゼロへ

思い切った対策を

昨年1年間、振り込め詐欺など特殊詐欺の被害額が、全国で559億円を超え、過去最悪になった。

金融機関などの協力により、窓口に来たお年寄りらの被害は減少傾向にある。これは郵便や宅配便で一度に多額の現金を送らせる「送付型」と呼ばれる新しい手口が急増したことが要因だろう。

また、受け渡しの手口別の被害額では、犯人とじかに接触する「手渡し型」が最多となっている。犯人グループは次から次へと被害者をだます新しい手口を考え出し、対策が後手後手になっているのが実情である。

私も当初はだまされる方がバカだと思っていたが、それは間違いで、明らかにだます方が悪いに決まっている。他人をだまして金品

を奪う行為は「詐欺罪」として刑法で罰せられることは誰もが承知している。しかし、この種の犯罪がなぜか減ることはなく、むしろ増加している現実は大きな社会問題である。

そこで私は、現行の罰則を2倍に引き上げて、20年以下の懲役にするとともに、執行猶予なしの実刑にすることを提案したい。詐欺金を受け取る「受け子」も同様に共犯者として厳罰に処すべきである。このような思い切った対策を取らない以上、この種の犯罪はなくならないと考える。

(2015年2月2日)

安全、快適な琴電を

1月21日付紙面の「新春インタビュー」で、琴電の真鍋康正社長は「琴電に何が求められているかを考え続けてきた」とあった。瓦町ビルの天満屋撤退後は「フラッグ」を立ち上げ、高松市の中心地を復活させた手腕を高く評価したい。

さらに、2月7日付と2月13日付の記事によると、琴電琴平線の三条―太田間に新駅を設置すること、栗林公園―仏生山を複線化することが決定したとのこと。それらの事業は、琴電、国、県、高松市が事業費を負担するという。

琴電は、県民の足としてなくてはならない公共交通機関である。新駅整備と複線化事業は、沿線全体の利便性向上や地域活性化につながる」と期待されている。

真鍋社長は琴電はあくまで交通事業者であ

り、客を安全、快適に運ぶことが第一とも述べている。しかし、琴平線に限って言えば、快適な乗りごこちとは決して言えないのが現状である。

市内中心部や起伏の少ない区間では感じないが、仏生山駅より西の起伏の多い区間は振動が大きい。次の目標はぜひ、快適さと安全性の向上に取り組んでほしいと思う。

(2016年3月21日)

過労自殺を繰り返すな

ある。このような悲惨なできごとが繰り返し起こらないことを切に望むばかりである。

(2016年11月28日)

「体も心もズタズタ」と悲痛な言葉を残して大手広告代理店の新人女性社員が自殺した。

就業規則で定めた労働時間の「最長で月70時間」を大幅に超え、月100時間以上であったが、上司から記録を改ざんするように指示されていた。さらに、土日返上で仕事を頑張ったにもかかわらず上司から評価されず、さまざまなパワハラを受けていたことも判明した。その結果、うつを発症し自殺した。

国は2014年11月に過労死防止対策法を施行したが、その後も仕事の原因の自殺は後をたたないのが実情である。「過重労働撲滅特別対策班」通称「かとか」を昨年4月に発足し、働き手を酷使する「ブラック企業」の取り締まりを強化している。

長時間労働の抑制は、政府の働き方改革の柱である。日本は法治国家であり、先進国で

大原孫三郎に学ぶ

労働問題について、政府や財界では「働き方改革の実現」のスローガンのもと、議論が活発化している。一方、大手企業の過労死や過労自殺も社会問題化している。

最近、「大原孫三郎」という人物が注目を集めている。孫三郎は岡山県倉敷の大地主と倉敷紡績の経営者の地位を継承し、美術館や病院、大原社会問題研究所の創設など、社会や教育のために尽力した実業家である。

大地主であり、大企業の経営者でありながら、経済社会的格差の拡大によって労働問題や社会運動が頻発する時代に「地主と小作人、労働者と資本家の利益は一致する。従って共存共栄を目指すべき」と考えた。

自ら経営する倉敷紡績の業務を次々刷新した。女性工員の寄宿舎の改革や「飯場」制度の廃止など、非合理性かつ非人道的な状況の禍根を断つ

た。

「人間そのものがその人のすべての財産である」という考え方が科学的・文化的に人間らしい幸福を追求するという視点が誰よりも強かった。

現在の経営者に欠けるものは、経営者としての使命感、倫理感ではないのか。今から約100年前も前、大正時代に理想と善意を実践した大原孫三郎に、今こそ学ぶ必要があるのではないか。

(2018年9月17日)

新型コロナウイルス対策「基金」の創設を

新型コロナウイルスの感染拡大が、日本はもとより世界中に猛威をふるっている。

有効なワクチンの開発が早急に求められてはいるが、今のところ特效薬はない。

新型コロナウイルス特措法に基づく緊急事態宣言の対象地域が全都道府県に拡大され、知事の要請で休業した事業者らへの補償を求めているが、国は補償しないという。

急激に悪化している雇用面の対策として、首相は所得制限を設けず1人当たり10万円を給付することを決めた。

麻生財務相は会見で、10万円について「要望される方、手を挙げる方に配る」と条件を付けた。これでは「スピード感」は薄れると思う。アルバイト・パートなどの非正規雇用者はたちまち現金収入がなくなり、生活に困窮している人も大勢いる。生活苦で自らの命を絶つ人が出

てくるのは容易に想像できる。

そのような深刻な事態を防ぐためにも、一刻も早く給付を実行すべきと思う。給付を必要としない人は、一度受領した後に、「基金」に寄付すれば良いと思う。

憲法第二十五条、すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有す。以上を肝に銘じたい。

(2020年5月4日)

沈没事故 児童らを称賛

去る10月19日、坂出市与島沖で小型船が沈没した。修学旅行で乗船していた、坂出市立川津小の児童ら62人は全員が無事救出された。読者の多くは65年前の宇高連絡船「紫雲丸」の沈没事故を思い出すと思う。死者168人（うち小・中学生100人）の大惨事であった。

しかし、同じ海難事故でありながらなぜ大惨事を免れたのか。本紙の記事にもあるように「三つの奇跡」があったからである。

一つ目は、近くの漁師が事故を早く発見して救助に向かったこと。二つ目は、季節外れの暖かさで、気温・水温に恵まれたこと。さらに、事故の発生した時間が日没前で、児童たちもパニックにならず冷静に行動できたこと。三つ目は、10日前に訓練していたこと。これらの一つでも欠いていたら、「犠牲者ゼロ」にはならなかったのではと思う。これらの奇跡は簡単には発生

するものではないだろう。まさに不幸中の幸いであった。

事故の救助に当たった漁師の皆さんにまず感謝を申し上げると同時に、パニックにならずに、救助の順番を譲り合ったり、船の周りに人が浮かんでいないかを探したり、小学生とは思えない勇敢で冷静な行動を称賛したい。

コロナ禍の暗い世情の中で、全員が無事救助されたことを大いに喜ぶと同時に、同じような事故が二度と起きないことを願うばかりである。

(2020年12月21日)

子どもは親のものではない

去る3月14日夕、福岡県田川市で駐車していた乗用車内で4人の遺体が発見された。近くの無職の女性(37)と小学生の長女、長男、未就学の次女の子ども3人である。

遺書には、子育てや生活への不安が記されていたという。女性の母親もこの女性宅に同居していた。家庭の問題も児童相談所が把握していたという。コロナ禍と無関係ではないと察するが、限られた情報では、真実は不明である。

無理心中とは、企てた者が他の者の同意なしに死を実行することである。まして、今回は母親が3人の子どもを道連れにしたのである。子どもといえども、別の人間であり、夢や希望や可能性がある。わが子と言っても、親の所有物では決してないはず。子どもを命を奪う権利はない。

自分の苦しみを一人で抱え込まず、周りの人

たちに相談してほしかった。それがかなわなければ、「いのちの電話」等の社会のセーフティネットに相談し、助けを求めるべきであった。このような悲惨な事件がくり返し発生しないことを祈るばかりである。

(2021年5月24日)

子どもの命を守れ！

コロナ禍とはいえ、今年の3月から7月のわずか5カ月の間に、多くの子どもの命が失われた。

3月には、小学5年、1年、未就学の3人の子どもたちが、無理心中の犠牲になった。6月には、千葉県で飲酒運転で暴走した大型トラックの下敷きになり、小学2年と3年の男児2人が死亡、1人が意識不明の重体、2人が重傷を負った。

7月には同県で軽乗用車内に1歳の女児が放置され、熱中症で死亡した。同月、福岡県の保育園で、送迎バス内に5歳児が降ろし忘れのため、これも熱中症で死亡した。

これらの事件・事故ではいずれも、幼児から小学生までの低年齢の子どもたちが被害に遭った。また、どの事件も、保護者、または周囲の大人の責任である。死亡を防げた可能性も大きい。

い。

以上の事柄を検証すると、全てに共通した点があることに気づく。それは、まさに「人命軽視」である。必ず子どもたちの命を守るという意識に欠けている。

私たち大人は、しなければならぬことは必ずする。してはいけないことは決してしない。この単純なことを、きつちりと実行することで子どもたちの命を守ることができると信じる。

(2021年9月20日)

数学嫌いの人がなぜ多いのか

本欄に掲載された「数学 将来役に立ちますか」(21・5・17)と「数学が苦手との投稿者に」(21・5・31)の投稿文は強く印象に残っている。

義務教育の科目である中学の数学が最も基礎であり、学習内容を十分理解せずして、高校の数学は理解できない。タイトルの「数学嫌い」の原因についても、学ぶ側から述べたい。数学には、非日常的な用語(言葉)が多く出てくる。連立方程式、因数分解、三角関数等、数学独特な用語や記号を理解し、決まりごと、約束ごとになれることが重要だと思う。この認識がなかったことが原因の一つ。

数学を教える側も、いきなり学習に入るのではなく、これが実生活の上で何に応用されているかを、抽象的でなく、視覚化(見える化)して具体的に説明することで、学ぶ者に興味を引き、やる気が起こるのではないだろうか。

ある会合で、数学が専門の元中学校長の方が言われた。メーカー側の人は、数学は役に立つばかりが必要な学問である。しかし、ユーザー側の人は、数学が分からなくても、日常生活に困ることはない。むしろ、嫌いな人は勉強することが苦痛になる。

しかし、私たちが日常的に使用している、スマホやパソコンなどの電子機器、自動車のエンジンやブレーキ、テレビの画像、心電図、気象観測等々、数え切れないほど、数学の恩恵に浴しているのである。

(2022年4月18日)

「ロシアについて」を読んで

今年の2月24日に、誰もが予想しなかったロシアによるウクライナへの侵攻が始まった。21世紀に入って初めての本格的な国対国の戦争である。現在も激しい戦いが続行しており、終わりは見えない。

戦争に至った原因や経過は日々、マスコミ等で周知の通りである。このたび、1986年に刊行された司馬遼太郎の文庫本を読んで、自分の考えを述べたい。

標記の「ロシアについて」は、作者が「坂の上の雲」と「菜の花の沖」という作品を書いている時、ロシアとは何かということをも10年間、考え続けたことを著述したものである。

旧ソ連は、領土的には帝政ロシア以来、膨張によってできあがった国であること。ロシア人によるロシア国家の成立は、わずか15、16世紀にすぎないこと。若いぶんだけ、国家としてた

けだけしい野生をもっていること、等が書かれている。

作者はロシアという国が、特異性を持った国であることを認め、しかし、好きでも嫌いでもないと書いている。

報道されているように、ロシアはウクライナの非戦闘員である一般国民や子どもたちまでも殺害している。私はこれらを断じて許すことはできない。プーチン大統領をはじめ、ロシアの戦争指導者たちは真実を伝えなければかりか、平和を求める国民に表現の自由や、反政府集団行動を暴力で封じている。ロシアの国民は、戦争に反対したくても意思表示すらできずに黙認しているのが現状だと思う。

ウクライナ侵攻のツケはロシアの国民の生活に重くのしかかっている。

この戦争に反対するロシアの国民の覚醒にわれわれは大いに期待し、一刻も早く、戦争を終わらせてもらいたい。

(2022年9月19日)

映画「八甲田山」を観て

新田次郎著「八甲田山死の彷徨^{ほうこう}」を原作とした映画「八甲田山」は、歴史に残る最大の遭難事件でよく知られている。

1902（明治35）年1月23日、遭難部隊の青森歩兵第5連隊は210名の大編成で出発した。この連隊は死者199名を出した日本陸軍史上でも最大の冬季軍事訓練の遭難事件となった。

一方、弘前歩兵第31連隊は同時に出発したが、一人の遭難者もなく、全員が無事生還できたことと対照的である。

遭難の原因は以下の5点と考えられる。

- ① 気象条件を甘く見て、行事を強行した。
- ② 貧弱な装備で厳冬の登山に対応した。
- ③ 指揮系統の混乱を招いた。指揮官はあくまで神成大尉であるが、大隊本部として同行した山口少佐が独断で指揮命令をした。

④ 極端な情報不足であった。地元の案内人のアドバイスを無視したばかりか、全行程で案内人を立てなかった。山口少佐の独断と神成大尉の準備不足が大きく影響した。

⑤ 認識の不足、青森歩兵第5連隊では、厳冬の八甲田山における防寒の知識は皆無であったにもかかわらず、晴天に恵まれた先の予備行事が雪の中の遠足のような危機感の欠如があった。

今から121年も前の遭難事件ではあるが、この事件は今日の私たちにも多くの教訓を与えていると思う。

大小を問わず、組織のリーダー（指導者）には、①正しく決断する②現場を知る③責任を取るの三つを訴えたいし、国内外を問わず、厳しい昨今の情勢の中、正しく導いてくれる真のリーダーを大いに期待したい。

（2023年3月6日）

映画「福田村事件」を観て

今からちょうど100年前の1923年9月1日に関東大震災が発生した。その5日後、千葉県福田村（現在の野田市）で香川県から来た行商人ら9人（幼児や妊婦を含む）が地震後の混乱の中で、話すさぬき弁を理解してもらえず、朝鮮人だと誤信されて虐殺されたのが「福田村事件」である。

彼らはなぜ殺されたのか、村人たちはなぜ彼らを殺したのか。歴史の闇に葬られていた実話に基づいた映画である。

映画は、殺された側の売薬行商団一行のなりわいを淡々と描き、一方の殺した側の福田村の村人たちの生活をさまざまな問題を抱えた群像劇として捉えつつ、進行していく。さらに、この事件を世間に報じるマスコミとして地元の新聞社（ラジオはまだなかった）の記者の葛藤も同時に展開していく。

この時代の背景として、1910年8月より日本は韓国を併合しており、日本の植民地支配からの独立を求める朝鮮人による示威運動が多発していたため、彼らを差別して「井戸に毒」「放火、略奪、強姦」と恐怖心をあおり、攻撃を促したのは時の政府であり、新聞であった。

大震災発生後、政府は関東一円に戒厳令をしいた。それ以後、国民は自警団を組織して「殺してもいい」というお墨付きを与えられ、堂々と人を殺すことができたのである。普段は善良な国民が、自分や家族、村が襲撃されると知らされたら、殺人者に変貌するのである。

この映画は、フェイクニュースなど、誤った情報が氾濫する現代を生きる私たちへの警鐘だと思った。

（2023年10月9日）

「国際連合―その光と影―」 を読んで

本書「国際連合―その光と影―」は38年前、明石康さんが国連事務次長の要職にあった時に出版した本である。

新書版で、発足から、冷たい戦争、変貌、試練、苦悩まで、国連が理想とは程遠い、多くの課題を抱えた国際機関であったことが述べられている。

注目したいのは、安保理事会の拒否権を容認していることである。拒否権は、常任理事国の5カ国が持つ権利である。実質的に、総会よりも強い権限を有している。常任理事国の1カ国でも拒否権を行使すれば、何も決めることはできない。

ロシアがウクライナに侵攻して2年が経過した。この拒否権のため、現在の国連はこの戦争を止めることができない。

先に述べた拒否権の容認は、その権利を持つ5大国が、自らが他国に侵攻することはないだろうという期待と展望が前提であったことを、明石さんは言明している。

この前提が壊された今、国連には改革が求められている。

具体的には、国連総会の強化である。全加盟国の3分の2以上の議決があれば拒否権が無効となる強い権限を有するという改革である。

簡単なことではないが、日本をはじめ世界が国連の改革に向けて真剣に努力し、実現することを切に希望したい。

(2024年6月3日)

第二部 大学に関係した投稿文

神大の思い出・・・

第17回インターゼミを回想して

木田 晴康（S46 経済学科卒）

私が神奈川大学に入学したのは1967年（昭和42年）のことで、当時竣工したばかりの新体育館において入学式が執り行なわれた。大学に入学して一番驚いたのは、学生の多さだった。余り広くないキャンパスや教室はどこも学生であふれかえっていた。当時は大学の職員の方が授業の出席を取っており、出席率は抜群に良かったと記憶している。

特に授業で印象に残っているのは、大泉行雄教授の経済政策、信太正三教授の倫理学、原司郎教授の金融論、大野信三教授の経済原論等である。

1～2年生の頃は、サークル活動に熱中しており私は経済研究部に入部していた。当時の部室は、旧図書館横のプレハブ長屋に貿易研究部（以下、「貿研」と共同で使用しており、そのせいで貿研の人たちとの交流も多く、後に私が大野信三ゼミに入れたのも貿研の先輩のお陰であった。そしてその大野ゼミから私の大学時代の一番の思い出となるインターゼミへと繋がることになる。

このインターゼミとは「日本学生経済ゼミナール」のことで、その第17回大会が1970年11月に本学に於いて、3日間大学を借り切って開催されたのである。本学開催は3年前から先輩が誘致を決定しており、第15回大会は福岡大学、第16回大会は愛知大学でそれぞれ開催されている。本大会の開催は何が何でも実施し成功させなければならなかった。まさに母校の名誉をかけた大会であった。

当時、本学の経済系ゼミはどれも活発であったが、インターゼミのような全国規模のゼミ

の開催は大変なことであり、おいそれと名乗りを上げるゼミは多くなかった。そんな中、我が大野ゼミは全面的に協力することを決め、他の経済系のゼミにも呼びかけて大会実行委員会を作ることになった。大野ゼミからは、斉藤秀雄君を実行委員長として推挙し、私が裏方の事務局をおおせつかった。他に森ゼミの星久史君、斉藤ゼミの川崎武敏君、石田ゼミの植竹和君、中村ゼミの下村博君、井上修君、原ゼミの池上修一君、志摩雅範君、諸田ゼミの延田健次郎君、そして紅一点、石田ゼミの池上範枝さんと、各ゼミからの委員も集まり何とか組織らしきものが整って、ようやく実現の可能性がでてきた。大学当局とも交渉して専用の部屋も確保したが、確かそこは7号館の地下教室だったように思う。

それからは、まず春休みに先のインターゼミに参加した大泉ゼミの先輩から講義を受けて、インターゼミの歴史や現状、問題点といったことを勉強した。

インターゼミは全国を6ブロックに分割し、各地区のブロック校が開催の大学を支援することになっていた。本大会では関東ブロックの支援校として関東学院大学のゼミ連が全面的に協力してくれることになり、ゼミ連の幹部の方々とは互いの大学を訪問しあい、箱根で合同の合宿なども行った。

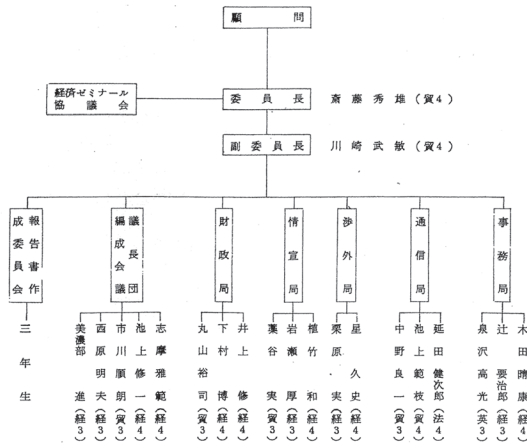
大会日程の決定、各大学への参加要請、各ゼミへの研究テーマの決定、宿泊施設の斡旋、教室の割り振り、広告費捻出の為の各企業への賛助金の募集等など、数え切れない程の仕事が山積みしていた。それらのことを学生である我々が全て自らの手でやらねばならない。全くの素人ばかりの集団である。実行委員の役員たちは何度となく討論を繰り返す中で、意見をぶつけ合って無我夢中で取り組んだ。時には逃げ出したいと思ったこともあった。しかし、大学のメンツがかかっている。ここでインターゼミを中止することになっては、先輩たちに申し訳がたたない。そんな思いの

中、我々実行委員の仲間たちは必死で団結し、大会開催に向け協力しあった。

それら実行委員全員の並々ならぬ努力、そして各ゼミのゼミナリステン、大学当局、関東ブロックの支援により、無事、本大会を成功裡に終えることができたわけである。大会当日の3日間は、全国のゼミから千数百名の学生たちが我が神大に集い、各々専門のテーマにそって発表し、討論を行い、大変意義深い大会となった。

当時は神大だけでなく何処の大学も紛争をかかえており、本大会も開催そのものが危ぶまれていた。しかしロックアウトや休講が続く中でも、学問への欲

～第17回 大会実行委員会組織図～



求は決して衰えることなく、かえってゼミ生の団結は強固なものになり、その情熱がインターゼミの開催を可能にしたのだと思う。

あれからもう40年以上が経過し、今では懐かしい思い出となった。我々がこの大会で得たものは、学問そのものよりも人と人との繋がり大切さ、目標に向かってひたすら努力することの意味であったと思う。

ただ残念なのは、法学部出身の延田健次郎君が13年前に、今年3月には当時の委員長だった斎藤秀雄君が他界したことです。両君共に優秀な人物で、白熱した議論で仲間が言い争った時、よく仲間たちをまとめてくれました。ご冥福をお祈りするしかありません。

そんな悲しい出来事もありましたが、当時の仲間たちとの交友は今も続いており、彼らと再会して、神大での青春時代を語り合えるのを楽しみにしている。

宮陵会香川支部結成六〇周年記念誌より

(2013年)

第90回箱根駅伝予選会から

見えてくるもの

箱根ウォッチャー 木田 晴康

(S46 経済学科卒)

箱根駅伝予選会は平成25年10月19日、東京立川市の陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、国営昭和記念公園にゴールする20kmのコースで行われ、今回久しぶりに応援に駆けつけた。

我が神大は本選出場校13校のうち4位で見事に通過した。特に活躍した柿原聖哉（3年）が6位、我那覇和真（2年）が7位と好走しチームを牽引した。西山凌平（2年）も20位と続き、前回の山登り5区で失速した柏部孝太郎（3年）も44位とまずまずの走りであった。シード権に届くには上記の選手以外の底上げが必須条件である。大後栄治監督が言うように「まだまだ総合力が足りない。さらなるチームの競争意識が必要」だ。

第90回大会は23校が出場し学連選抜チームはない。本選でシード権を獲得するためには10位以内に入らなければならないが、今の神大の実力で果たしてそれが可能だろうか？

周知のとおり、ここ数年は15位〜17位と低迷しており、大学のいう強化策に結果が出ていない状況が続いている。1997年〜1998年と連覇を遂げた神大である。このままで満足できるはずがない。しかし、明るい見通しがないわけではない。前回の本選で我那覇選手が7区で区間賞をとり復路は6位と健闘したことだ。去る11月9日に開催された四国ブロック会議において正野常務理事から報告されたように、ここ7年間で最も良い選手が揃っており、シード権獲得も現実味を帯びてきたとのこと。さらに、上位校に追いつくべく全国から有力選手のスカウトも功を奏しつつあるとのこと。新1年生13名中9名が高校ランク上位の選手たちだ。四国からは高知農業の浅利と宇和島東の鈴木の両選手を

獲得したとのこと。

記念大会となる今回の箱根本選では、何と
しても長年の悲願であるシード権内に入って
もらいたいと切に願う。その為にも全員で応
援しよう！『箱根の神大』を再び呼び戻すた
めに！

神大レポート10号 (2014年1月)

第91回箱根駅伝神大「背水の陣」

箱根ウォッチャー 木田 晴康

(S46 経済学科卒)

10月18日(土) 箱根駅伝予選会が行われ神
大はトップで通過した。6月に行われた全日
本大学駅伝予選会でも1位通過したが、11月
に行われた本選では総合10位の結果に終わっ
た。

さて、大本命である箱根の本選はどうなる
のか？

昨年の第90回大会では、四国ブロック会議
において、正野常務理事から「ここ7年間
で最も良い選手が揃っている。シード権獲
得も現実味をおびてきた。」との報告があり
大いに期待していたが、結果は誰しも予想し
なかった総合18位と惨たんたる結果に終わっ
た。1997年、1998年と二連覇して以
来、低迷しており特に2006年〜2013
年は15位〜17位と下位グループに定着。昨年
は1974年の20位に続く18位と神大陸上部
としてはワーストの成績だ。

今大会は柿原聖哉(4年)、我那覇真(3年)、
西山凌平(3年)の三本柱を往路に配して先
頭グループにつき、その勢いで鈴木健吾(1
年)、大川一成(1年)の活躍が期待される。
5区、6区の特設区間はどうか？5区

渡辺慎出（3年）、6区東瑞基（2年）あたりが予想されるが確実ではない。上り下りの区間のスペシャリストは存在するのか？

今回は「5か年計画」の最終年である。「シード権獲得」を選手も大学も掲げている以上、シード権獲得（10位以内）以外は敗北と考えが良いと思う。箱根ウォッチャーとして、またサポーターとして応援しながら何度も裏切られ続けたこの悪い流れを、何としても断ち切ってもらいたいと思うのは私一人ではないだろう。その意味でも今大会こそは「背水の陣」で臨んで欲しい。

全出場選手が故障なく各人が自己ベストを出せば、シード権獲得も達成できると信じている。

神大レポート11号（2015年1月）

脱「箱根」を目指して

（これからの神大に期待したいこと）

木田 晴康（S46 経済学科卒）

去る、平成27年9月12日に四国ブロック会議が愛媛県内子町で開催されました。内子町での開催は12年ぶりです。創立者米田吉盛先生の出身地であり特別に意義深いものがあります。

さて、昨年6月に公表されました法科大学院の学生募集停止に象徴されますように、近年の神大の評価は必ずしも高くなく、むしろ低下傾向にある（志願者数の減少とそれに伴う偏差値の低下等）のではないかと周囲からの声が多く聞かれるようになりました。

「本当に強い大学2015」（週刊東洋経済臨時増刊号2015年5月刊）のトップ300の中で、なんと我が神大は278位と最下位グループにランキングされています。

同ランキングは「教育力」「就職力」「財務力」「国際力」の4つの指標で東洋経済新報社が独自に算出したものです。このランキングを100%信用するわけではありませんが、正直言ってあまりにも低い評価にショックを受けました。大学当局におかれましては、石積学長をはじめ多くの大学関係者が努力されていると思いますが、私の一番強く感じることは教育の質（大変失礼とは思いますが）の問題ではないかと思えます。

大学教授の仕事は教育と研究であることは承知していますが、他に学内サービスや学外サービスがあるとも聞いています。

近年、神大の教授がテレビ・新聞等のマスコミに登場することはほとんどありません。地方に在住する者として全国放送や全国紙に登場しないことは大変寂しい限りです。（H27・12・16 経営学部の青木宗明教授が民放TVの「ひるおび」に登場しましたが）米田先生は「教育は教員にあり」という信念のもと、

多くの優秀（著名）な先生方を神大に招聘しました。優秀な教員のもとには優秀な学生が集まるのではないのでしょうか。教育環境の整備は進行しておりますが教育の質（＝教員の質）にも一層注力してもらいたいと思えます。

米田先生は「建物が貧弱でも、如何なる教授陣を本校が有するかを見れば、本校の責任の益々大なるを感ずる」と教授団の構成には誇りを持っていたとあります。（「教育は人を造るにあり」より）今こそ創立者米田吉盛先生の信念（原点）に帰り、優秀な教授陣を招致して欲しいと思えます。

母校神大も12年後には創立100周年を迎えます。100周年は大学にとっても大きな節目ではありますが、何もしなくても100周年は来ます。真に世の中に求められる大学、必要とされる大学になるために現状を打破して欲しいと思えます。

新年早々、厳しいことを申しましたが決して自虐的な発想ではなく、真に神大を愛する

が故であります。母校の発展を願わない者はいません。我々卒業生も、母校神大の一層の躍進のために大いに尽力したいと思います。

標題のように、今回はあえて「箱根駅伝」には一切ふれませんでした。箱根ウォッチャーとしての私の真意を察してもらえれば大変ありがたいです。

神大レポート12号 (2016年1月)

東北の旅

木田 晴康 (S46 経済学科卒)

神大大野信三ゼミのOB会有志で、毎年1泊2日のゼミ旅行を実施している。

昨年11月11日午後4時、岩手県平泉温泉のホテルに集合、翌日午後2時、現地解散の日程で参加した。

ここ数年は毎年欠かさず旅行に参加している。参加者は3期生、4期生、5期生(自分たち)、6期生の合計12名。ホテル武蔵坊で午後6時より宴会、その後は深夜まで各自の近況報告や時事問題等大いに語り合った。翌日はホテルのマイクロバスで世界遺産の毛越寺(もうつうじ)へ行き、広大な庭園を散策、その後、中尊寺へ移動。8年振りであったが真紅のいろはもみじがひときわ美しく印象的だった。昼食はわんこそばを味わい来年の再会を約束して解散した。その後、JR一関駅より予約していたレンタカーで福島へ向けて東北自動車道を南下、クラスの友人、紺野君(岡野鑑記ゼミ)に数十年振りに再会し、猪苗代湖へ車で直行、湖畔のホテルで一泊。翌日、野口英世記念館を見学。その後、会津若松へ。雄大な磐梯山を観ながらのドライブは快適なもの。会津の誇る鶴ヶ城天守閣は美しさとスケールの大きさを圧巻であった。その後、昼食は喜多方ラーメンの本場、喜多方へ。兼

ねてよりの希望が実現して大満足を味わうことが出来た。

喜多方より再び福島に戻り紺野君の自宅へ。しばしお邪魔して夕刻レンタカーで盛岡へ直行の予定が時間の余裕がなく、途中仙台の東横インで一泊。ホテル近くの居酒屋で一人牛たんを食べる。翌朝、目的地の岩手大学へ直行。岩手大学は亡父の母校で旧盛岡高等農林学校である。当時の本館が修復後現存しており、資料館、大講堂を見学。歴代の卒業集合写真が展示されており、父も昭和17年9月に繰り上げ卒業していた。余談であるが、父の卒業後5年で自分が誕生していることを思うと、そんなに大昔のことではないことを実感した。

―閑話休題―

11月10日に自宅を出発して16日に帰宅したので、足掛け一週間の心に残る東北の旅であった。

神大レポート13号 (2017年1月)



第94回箱根駅伝

神大優勝なるか！

再び箱根ウォッチャー

木田 晴康（S46 経済学科卒）

箱根駅伝2018を展望すると、三連覇中の青山学院大、出雲を制した東海大、そして全日本を制した母校神大の三強の戦いとみられている。

先の全日本大学駅伝では、戦前の大方の予想は連覇を狙う青学大と二冠を目指す東海大の一騎打ちだった。しかし上り調子のダイクホース神大が20年振りに優勝した。

そこで全日本を振り返ると、1区山藤篤司（3年）がトップと5秒差の区間4位でスタートすると、2区の大塚倭（4年）が区間7位で4位から順位を一つ上げ、3区の荻野太成（2年）は区間5位で4区の鈴木祐希（4年）

は区間5位にタスキをつなぎ、5区の越川堅太（2年）が区間賞の走りでも2位に躍り出ると、6区の安田共貴（2年）が区間4位の走りでも2位をキープ、7区の大川一成（4年）も区間4位でまとめ8区の大エース鈴木健吾（4年）へとつないだ。トップを行く東海大とは17秒差だった。鈴木健吾は3km地点で逆転し、その後も差を広げて最終的には2位東海大に1分18秒差をつける圧勝であった。

母校神大は20年ぶりに全日本を制した。

再び箱根駅伝に話をもどすことにする。指揮官の大後栄治監督は「往路優勝と総合3位以内」を目標としているが、選手たちは「総合優勝のチャンス」と声をそろえている。鈴木健吾主将も「うちは10人戦える選手をそろえるのがギリギリなので登録メンバー16人のことを考えると、選手層の厚い青学大や東海大にかないません」と言う。「メンバーが最高の調整をして一人のミスもださなことが勝

利の条件」とも言っている。

予想オードラーとしては、往路の1区山藤篤司、2区鈴木健吾、3区越川堅太、4区鈴木祐希、5区荻野太成、復路の6区安田共貴、7区秋澤啓尚、8区大野日暉、9区大塚俊、10区大川一成となる。

往路の1区〜3区でトップに立てば良い流れが出来て、4区、5区でキープすれば往路優勝も見えてくる。復路は鈴木健吾のようなスーパーエースはいないが、小堅くまとめれば上位進出は可能と思われる。三強の他に東洋大、順大、駒大も強化しており、優勝にからんでくる可能性もある。

1997年、1998年の箱根で二連覇したときは、いずれも前年の全日本も優勝している。全日本の優勝の流れを箱根にもぜひ実現して欲しいと思う。

頑張れ神大！

神大レポート14号 (2018年1月)

私の初夢

木田 晴康 (S46 経済学科卒)

明けましておめでとうございます。

私は、本年年男(亥年)です。お正月にちなみ、私の初夢をご披露します。

・『今日は、2021年4月8日(木)です。今、私は開設したばかりの神大「みなとみらいキャンパス」の地上21階の教室にいます。今年の4月に神大「国際日本学部」に入学しました。卒業以来50年振りに神大に戻ってきました。授業は国際系の歴史と法律を学んでいます。窓からはあの国際港ヨコハマがすぐ目の前に見えています。待ちに待った神大「みなとみらいキャンパス」が完成し好きな学問ができるのです。胸が熱くなりました。このキャンパスは、神大創立の地である桜木町に近く、抜群の立地(アクセス)で、周囲の高層ビルの中でも一際目立つ美しい高層の近代

的な建物です。

「みなとみらいキャンパス」は正に大都市、ヨコハマにふさわしい都市型キャンパスで、1階～3階は賑わい交流ゾーンとして、ビュッフェ、ラウンジ、多目的ホール、託児施設、図書館、ブックカフェ等があり一般に解放されています。何と羨ましい豪華な施設なんだろう。私は1971年（昭和46年）神大経済学部を卒業したので、2021年の今は50年振りの大学生を体験していることになります。

憧れのヨコハマ、大好きな横浜の街で、50年振りに再び大学生に戻れるとはなんと幸せな人生だろう。涙がドット出てきました。

そして、研究のテーマは「奴隷及び奴隷制度の研究―労働法の視点よりの考察」です。』
・・ここで夢から覚めました。

神大MM21キャンパスのアクセスとしては、JR桜木町駅及びみなとみらい線のみなどみらい駅（地下鉄）のいずれの駅からも徒歩数分の所に位置しています。神大のキャンパス

（21F）はみなとみらい大通りに面し、三菱重工業ビル（34F）、横浜銀行本店（28F）、横浜ランドマークタワー（70F）があり、けやき通りにはクイーンズスクエア横浜（クイーンズタワーA（36F）・B（28F）・C（21F））の大型商業施設や神大の入学式、卒業式の会場でもある横浜みなとみらいホールがあります。神大キャンパスのすぐ南にはいちよう通りがあり、横浜美術館、マークイズみなとみらい（大型商業施設）があり、国際大通を隔てて、パシフィコ横浜大展示ホール、横浜国際会議場、ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル（31F）と続きます。これだけ周囲の高層ビル群に囲まれているので、最上階の21階からでも横浜港を見ることがあまり期待できそうもありません。横浜港を見るのであれば、やはり赤レンガ倉庫や港大さん橋や山下公園に行くのが良いでしょう。

神大MM21キャンパスの紹介はこの辺にしておきましょう。

次に私が神大に魅かれる理由を述べましよう。

50年前、丸亀高校を卒業して関西の有名私大を受験してことごとく失敗しました。特に進学したい大学はなかったのですが、浪人して補習科に在籍していた時、たまたま学校の図書館に神奈川大学の紹介と入試問題の本（いわゆる赤本）に遭遇したのです。この本を読んで、一遍に気に入りました。自分の今の学力であればこの大学が一番良いと思い、2年目の受験は神大一校に絞りました。受験も地方試験ではなく横浜の本校に行き経済学部と法学部を受験しました。結果は両方とも合格しました。経済と法律のいずれに入るのが良いのか迷いましたが、周囲の人の薦めもあり経済に決めました。

現役の受験に失敗したので、浪人の自分としては何が何でも合格しないとイケないと思ひ勉強しました。いざ入学してみると、自分と同じような学生が大勢いることが分かりま

した。この大学が自分を唯一救ってくれた大学だと思い、以来、俄然神大が好きになりました。クラスの友人、サークルの友人、ゼミの友人と多くの友人ができました。そして、香川県人会（当時）の素晴らしい諸先輩の皆さんにもお会いできました。自分は幸せな人間だと思っています。少なくとも、現役受験の際、私を不合格にした関西の大学には絶対には負けたくないと思っています。

そして、法律関係の講座が圧倒的に不足していたので、放送大学を知り現在も法律を主として勉強しています。放送大学は学ぶ意思のある人であれば、入学試験はないので誰でも入学できます。基本は通信教育ですので、教材を使って、通信で課題（テスト）を提出し一定の点数（60点以上）をとれば、単位修得の本試験が受験できます。この試験で60点以上とれば合格して単位（2単位）が認定されます。春と秋の年2回、入学を募集しています。私は6か月で1科目ずつ学習して、単

位を修得しています。あまり欲張らずに、じっくりと時間をかけて勉強するのが自分に合っているからです。世の中、リカレント（学び直し）ブームです。自分の知りたいこと、学びたいことを選択して、一つづつ学ぶことは楽しく意義あることと思います。

・50年前の受験のことやら、3年後の近未来のこと等、訳の分からんことを文章にしているなど笑われそうですが、自分としては一貫するものがあり、今の自分の生きる原動力になっています。最後に、日頃より私の氣にいつている言葉を掲げて結びたいと思います。

永遠に生きるかのように学べ！

明日、死ぬかのように生きろ！

（マハトマ ガンジーの言葉）

神大レポート15号（2019年1月）

香川県宮陵会役員を退任するに 当って

木田 晴康（S46 経済学科卒）

この度、永年お世話になりました香川県宮陵会の役員を去るに当って、私をご指導して頂いた多くの先輩役員との想い出をこの場をお借りしまして記述したいと思います。あくまでも、私の個人的かつ主観的な想い出（感想）であることをお断りしておきます。

初代（3代目）支部長の滝野一郎氏（専13商卒）とは多度津町のご自宅に数人の役員の方々と共に訪問しましたが、あいにく奥様のみでご本人は不在でしたのであまり印象がありません。

2代目の川畑明氏（専8商卒・元大内町長）は私が香川銀行三本松支店に在任中に、三本松のご自宅でご本人と奥様にお会いしたこと

を記憶しています。

4代目の高田至康氏（専22電気卒）とは家が近く、氏が琴平町議会議長をされていて、中川静夫先輩とともに高田さん宅で何度かごちそうになったことは特に印象に残っています。私が現役の大学3年の時、神大吹奏楽部の演奏会が当時の高松市民会館で香川県人会主催で開催されました。演奏会のチケットを販売する為に現役の学生たちが数人集合して、高田先輩のご自宅を訪問したことを鮮明に覚えています。当時は高田先輩の御母堂様もご健在でした。皆で手分けして各高等学校等にチケットを販売するために走りまわりました。

5代目の野田清氏（専22経済卒）とも私が香川銀行多度津支店に在任中、仕事でもお世話になり、私の弟と野田先生のご長男が高校の親友だったこともあり、特にかわいがってくれました。そして野田先生（中学、高校の教師を歴任）にはご自身が主催するカラオケ大会に誘われたり、出版記念パーティにも招

待されました。

当時、相談役、顧問の川崎慶一氏（専16貿卒）元観音寺商工会議所会頭は香川県人会のゴルフ大会の折、エリエールGC（財田町）で私がお世話係を担当した際にお会いし、優勝賞品（トランジスタラジオ）等も私が準備しました。優勝したのはやはり川崎先輩でした。又、近藤洋信氏（34経済卒）とはゴルフを同じ組で回り、二人ともあまり上手とは言えないスコアでしたので、より親密度が増しました。

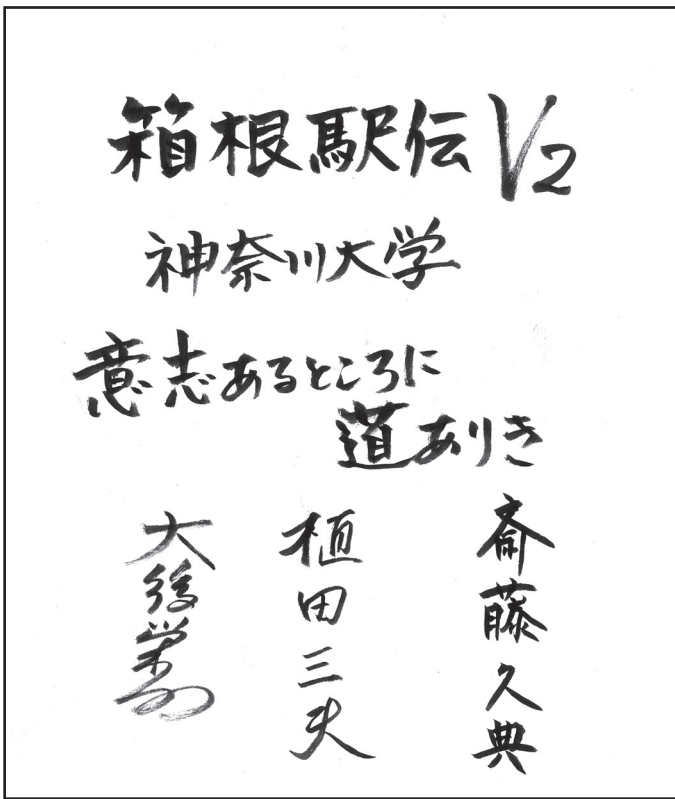
又、私が定年まで勤務しました香川銀行の大先輩の十川弘氏（35貿卒）も同じ職場の後輩としてかわいがってくれました。十川先輩とは四国ブロック会で高知に行ったことや、有志で母校（横浜）を訪問したことが特に印象に残っています。

無論、現役の役員の皆様にも大変お世話になりましたが、ここでは割愛させて頂きます。

永い役員活動の中でも、私が最も印象深いのは1997年（平成9年）の第73回箱根



母校神大より、植田監督、大後コーチ、斎藤マネージャーの3氏が高校生の陸上競技選手スカウトの為に来県される
1998年(平成10年) 琴参閣にて



色紙「箱根駅伝V2」はその折
3氏のサインとともに

駅伝で母校神大が初優勝した年の第3回四国
ブロック会(香川支部)です。四国ブロック
会としては初めて、琴平で開催しました。(平
成9年5月10日)

来賓として、細川宮陵会副会長、大野常務
理事、脇高松市長、山下琴平町長、速水史朗
先生ご夫妻、大後栄治陸上競技部監督等総勢

91名の参加で最大の盛り上がりでした。

今回、役員を退任させてもらいましたが、
会員であることに変わりはありません。今後
は、一卒業生、一会員として母校神大の発展
のために微力ですが、支援、協力したいと思っ
ています。

例えば、現役の大学生の頃から永年県人会、

宮陵会と多くの先輩の皆様にお恵まれ、皆様のご指導のもと、貴重な経験をさせて頂きました。このことは、まさしく私の財産そのものです。まさに感謝の心あるのみです。

皆様本当にありがとうございました。

神大レポート16号 (2020年1月)

70周年記念誌について

木田晴康 (S46 経済学科卒)

前会長の岩本克美氏の発案により、10年前「結成六〇周年記念誌」が刊行されました。記憶を記録にのコンセプトのもとに、当時の役員の皆さんと寄稿して頂いた多くの皆さんの協力のお陰で記念誌が作成されました。

あれから10年が経過して、この度、70周年記念誌として新たな年輪が刻まれました。「結

成六〇周年記念誌」に記憶を記録にの冒頭文、「発刊にあたって」(岩本支部長)を再読し、香川県宮陵会の歴史や諸先輩方の情熱と多大な貢献が詳しく記されており、感慨もひとしおです。

この度、寄稿文を書くにあたって、さて、何を書けば良いのか?正直言って迷いました。これまで、神大レポート等に寄稿した文を思い出し、重複しないテーマを取り上げることになりました。

そこで、特に印象深い忘れられない思い出を三つとりあげます。その一つは、箱根ウォッチャーの一人として、1997年(第73回大会)の総合優勝が最も印象深く、同年5月10日四国ブロック会が琴平で開催されたことです。来賓として、細川宮陵会副会長、大野常務理事、脇高松市長、山下琴平町長、速水史朗先生ご夫妻、大後栄治陸上競技部監督等総勢91名の参加で、最大の盛り上がりでした。

優勝候補でありながら、選手のアクシデン



(社)宮陵会四国ブロック会 於 琴平ロイヤルホテル琴参閣 平成9年5月10日(1997年)

トの為、棄権した翌年の初優勝でした。翌年の第九回大会も優勝し、神大の名を全国に轟かせました。箱根駅伝の神大は名実ともに全国区となりました。その後は、ご存じのとおりシード権内に残ることもままなりません。しかし神大創立100周年(2028年)に向けて、さらなる強化(シード入り)を目指し、もう一度「夢」を実現して欲しいものです。箱根ウオッチャーはまだまだ辞める訳にはいきません。オール神大でさらに応援しましょう。

そして、もう一つの思い出は、2003年10月18日、19日の母校訪問です。大学が主催するホームカミングデーに合わせて、総勢11名が参加しました。参加者は高田至康氏(22年専電気)と奥様、野田清氏(22年専経済)と奥様、十川弘氏(35年貿易)、高畑悦子氏(38年法律)、中川静夫氏(42年電気)、三谷洋勝氏(43年法律)、中村賢治氏(46年建築)、小泉康裕氏(49年法律)そして私木田晴康



第一回母校訪問本館前にて（平成 15年10月19日）

（46年経済）です。

母校訪問については、高畑悦子氏が2005年の神大レポート1号に「念願の母校訪問」として記述していますし、2015年の神大レポート11号に中村賢治氏が「神大訪問第20回ホームカミングデー参加報告」として詳細かつ面白く記述してくれています。訪問の初日は、定期観光バスで三溪園、山手西洋館、外人墓地、マリインタワー、赤レンガ倉庫、帆船日本丸等を観光しました。ここで、私の失敗談を一つ紹介します。三溪園のトイレにセカンドバッグを置き忘れて放送されたことです。恥かしい限りです。夜は横浜中華街で本場の中華料理を満喫しました。皆さんと共に最高の横浜の夜を楽しみました。翌日は、神大を訪問しました。ホームカミングデーは体育館で、1000名を超える卒業生が全国から集合していました。第一部は式典、第二部は懇親会での立食パーティーやアトラクション等で大いに楽しみました。新しくなった大

学の本館にも立ち寄って、最上階での360度の景観も圧巻でした。港方面にはMM21のあのランドマークタワー（当時は日本一の高さ）が聳えていました。まさか、この地にもなとみらいキャンパスが出来るとは当時は全く想像出来ませんでした。2021年4月に開設したみなとみらいキャンパスを是非、訪問しましょう。（出来れば本年中に）

最後にKUポートスクエアの紹介をします。従来（2004年4月）より、生涯学習の公開講座として、100種類以上の講座があります。リカレントとしての「学びの場」も母校神大にはあります。対面での講座は難しいと思いますが、インターネットの利用でオンライン講座も多くあります。是非、ネットで閲覧してみてください。

香川県宮陵会創立70周年記念誌より

（2022年6月）

齋藤秀雄委員長を偲んで

香川県 木田 晴康（75歳）

1971（昭和46）年経済学部経済学科卒業

今から53年前、母校神奈川大学にて「第17回日本学生経済ゼミナル大会」が開催されました。11月20日から11月24日までの5日間、六角橋のキャンパスで北海道から九州まで計51大学の参加で、延べ1500名の学生が集合し、各テーマごとに研究成果を発表し、討論しました。いわば学生による学会と称して良いと思います。

この大会は数年前に我々の先輩が、神奈川大学に17回大会として誘致したものです。当時の神奈川大学経済学部は教授陣も充実しており、各ゼミナルも活発でした。

1970年開催の2年前は、創立者の米田吉盛氏が学長・理事長を辞任し、カリキュラムの大改正、学内民主化闘争など大学紛争が

頻発。神奈川大学も静穏さを失いつつありました。

1年前は全共闘が、本館及び3号館を封鎖し、大学はロックアウトになりました。大学紛争は神奈川大学だけでなく、全国的な規模で国際反戦デー騒乱や成田闘争、三島由紀夫事件など騒然とした世情でした。

このような時期に学生主体のインターゼミが開催された次第です。神奈川大学はじめ全国のゼミの学生たちが本来の学問に情熱を注力したことは、大いに意義のあることであり、困難を乗り越えて、無事開催できたことに感謝したい気持ちです。

2022年11月17日、当時の大会実行委員のメンバー5名が10数年ぶりに、神奈川大学箱根保養所に集結し、旧交を温めました。

残念ですが、当時の大会実行委員長の齋藤秀雄君が10年前に鬼籍に入っており、この稿を齋藤君に捧げます。

宮陵No.72号より（2023年）



第三部 放送大学のサークルや同好会等への投稿文

私が放送大学に入学した動機

日本近代史研究サークル 木田 晴康

先の太平洋戦争で「日本は何故戦争を早期に終結することが出来なかったのか」という素朴な疑問を検証したかったからです。

1945年8月14日にポツダム宣言を受諾する前に、同年8月9日、長崎に原爆投下、8月8日、ソ連対日宣戦布告、8月6日、広島に原爆投下、4月1日、米軍沖縄に上陸、3月10日、東京大空襲、少し前後して、3月24日、硫黄島の日本軍全滅と日本が降伏するチャンスはいくらでもあったと思われまます。それなのに何故、ここまで戦争を継続しつづけ、そのたびに、数万、数十万人という犠牲者を出しつづけたのか。その最大の原因は、陸軍強硬派の暴走とそれを抑えられなかった

戦争最高指導者達の無能と卓越した指導者が存在しなかったからだと思われまます。

戦争終結の最良のタイミングは絶対国防圏の拠点でもあった、硫黄島の日本軍玉砕であったと学者をはじめ多くの国民の認めるところだと思えます。それは、米軍のB29をはじめ日本の本土攻撃を可能にすることを意味するものだからです。

それにもかかわらず、戦争指導者達は国民総武装を決定し、竹槍訓練を開始しました。日独伊三国同盟のイタリアは1943年9月に無条件降伏、1945年5月にドイツも無条件降伏しています。

1945年8月15日に天皇の玉音放送まで終戦工作がなかったわけではありません。ソ連に対しての仲介外交の失敗、米英に対しても読みの甘さがどんどんと戦争の深みに突き進んで行ったことは間違いないと思わ

れます。

私は自分のテーマとして、戦争終結のあまりに遅くに失った原因とその責任者は一体誰なのか、そして、昭和天皇の責任はどこまであったのかといったことに重大な関心を持ち続けています。それらの疑問を解くために放送大学に入学しました。

近代史研究サークルに加入しメンバーの皆さんと一緒に勉強し、また、議論したいと思っています。それを解決するためには何故戦争をはじめたのかという重大なテーマにも、ふれねばなりません。さらに、日本の近代国家の曙である幕末から明治維新にまでさかのぼる必要があります。そして、先に記した近代史研究サークルでは幕末から明治以降の歴史の勉強をメンバーのみなさんとしています。そこには、私のテーマへの解答のヒントがあるだろうと思うからです。

(放送大学サークル発表 2013年4月)

統一テーマ

「大東亜戦争への道」

発表テーマ

「太平洋戦争の始めと終わり」

木田 晴康

このテーマを選んだ理由として (1)何故日本は太平洋戦争に突入したのか という点と (2)何故もつと早く終戦することが出来なかったのか という2点です。

(1)を簡潔にまとめると

- ・ 1937年7月 盧溝橋事件がきっかけとなり、日中戦争が泥沼化へ
- ・ 1941年8月 米対日石油禁輸措置
- ・ 1941年9月 御前会議で「帝国・国策遂行要領」を定める。
- ・ 1941年10月 近衛内閣より東条英機内閣へ変わる。
- ・ 1941年12月 真珠湾攻撃太平洋戦争開始

(2) 太平洋戦争の終わり

いくつかのターニングポイント

・ 1942年6月5日 ミッドウェイ海戦で敗北

加藤陽子 東大教授

・ 1945年3月10日 東京大空襲

木田 (第1案)

・ 1945年6月23日 沖縄の日本軍全滅

木田 (第2案)

・ 1945年8月6日 広島に原爆投下

・ 1945年8月8日 ソ連の対日参戦

・ 1945年8月9日 長崎に原爆投下

・ 1945年8月15日 天皇「戦争終結」宣言

結論 戦争の終結は早ければ早いほど多くの

犠牲者を出さずに済んだのに、最悪の

タイミングに敗戦したことになった。

その原因は天皇の政治への直接の不介

入と戦争指導者達の無能によるものと

思われる。

「ポツダム宣言」も「黙殺」することで降伏するまで20日間を空しくすごした。

最近の衝撃的な著書として注目されるのは、日米戦争は時のアメリカ大統領ルーズベルトが仕掛けたものであり、日本の侵略が原因ではない。というものです。フーバー大統領がその回顧録で論じています。さらなる研究が求められています。この発表はあくまで現時点のものであり、今後一層の勉強を継続するつもりです。

(放送大学「ほうゆう」誌より 2014年)

大日本帝国憲法と太平洋戦争

平成29年11月11日 発表者 木田 晴康

(一) テーマ選定の理由

統一テーマ「大東亜戦争への道」へのアプローチとして、大日本帝国憲法がどのように関わったのかを考察する必要があると判断したからである。

(二) 現行の「日本国憲法」は平和主義を掲げており、第9条により戦争の放棄・戦力および交戦権を否認している。

周知のように現行の憲法のもとでは「戦争」は出来ないのである。

しかし、大日本帝国憲法には「戦争」を禁止する条項はなく、言い方を変えれば「戦争」が出来る憲法であった。

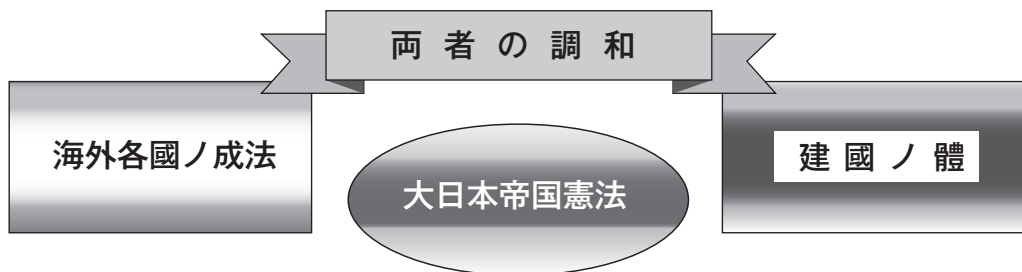
大日本帝国憲法の制定の過程については、明治維新まで遡らなければならぬがその点

は「憲法史」の問題としてここではふれない。

(三) 大日本帝国憲法は明治22年（1889年）2月11日に発布され、翌年の明治23年（1890年）に施行された。

伊藤博文により起草された大日本帝国憲法ではあるが、起草に至るまでの間には「建国の體」と「海外各国の成法」をめぐっての相克があった。

両者の調和により大日本帝国憲法は成立した訳であるが、その後も尚、憲法解釈運用における相克は続いた。



① 穂積八束（神権学派の代表者） 上杉慎吉

② 美濃部達吉（立憲学派） 明治45年

（1912年） 天皇機関説 佐々木惣一

「天皇機関説」とは、統治権は国家という法人にあり、天皇はその最高機関として他の国家機関の参与を得ながら統治権を行使すると説く見解で、天皇そのものに統治権（主権）があるとする「天皇主権説」に対する見解。

「大正デモクラシー」の中で美濃部学説^{II}「海外各国の成法」の影響力は大きくなっていった。しかし、昭和6年（1931年）の満州事変以降、美濃部学説に対する攻撃が増していき美濃部の天皇機関説は弾劾され（昭和10年の天皇機関説事件）大日本帝国憲法の運用は「建国の體」の側に大きく舵を切ったのである。

『天皇機関説事件』とは

大正時代〜昭和初期に優位であった美濃部の憲法解釈（天皇機関説）が反国体的であるとして昭和10年（1935年）に貴族院で菊地武夫男爵（予備役陸軍中將）が政府の処置を質したのに端を発し、対応を迫った。政府は次第に譲歩し国体明徴声明で天皇機関説を否定し同書を発禁処分とした。以後、軍に有利な状況が醸成され天皇の統治権（主権）を前面に、戦争を拡大していった。

（四）以上の経緯を理解すれば太平洋戦争による敗戦を終えて、昭和21年（1946年）11月に制定（公布）された日本国憲法はまさしく「海外各国の成法」に依拠した近代立憲主義の嫡流に属する憲法をいうことができる。

（五） 結びにかえて

以上、太平洋戦争（15年戦争の終盤）と大日本帝国憲法との関わりを見てきた。

現在の「日本国憲法」の改憲の議論が盛んになりつつあるが、憲法の問題は「戦争」に深く関わる問題でもある。我々は、過去の歴史の事実を深く学ぶことにより、戦争に巻き込まれる憲法に「改憲」してはならない。

〈参考文献〉

- 憲法(第四版) 芦部信喜(岩波書店) 2007年
 - 日本国憲法を考える 松井茂記(大阪大学出版会) 2004年
 - 日本国憲法を生んだ密室の九日間 鈴木昭典(創元社) 2006年
 - 憲法九条は私たちの安全保障です 大江健三郎他(岩波ブックレット) 2015年
 - 憲法に緊急事態条項は必要か 永井幸寿(岩波ブックレット) 2016年
 - 明治憲法の制定過程について(資料) (衆議院憲法調査会事務局) 2003年
- (放送大学サークル発表 2017年)

今こそ、大原孫三郎に学べ

放送大学選科履修生 木田 晴康

はじめに

昨今の労働問題について、政府や財界では「働き方改革の実現」や「同一労働同一賃金」のスローガンのもと議論が活発化している。

電通の新人女性社

員の自殺やNHK女性記者の過労死がマスクミに大きく取り上げられた。

これらの問題を常に考えていると、ある人物に関心が移った。その人物は「大原孫三郎」(1880〜1943)である。

大原孫三郎は岡山県倉敷市の大地主と倉敷紡績の経営者の地位を父親から継承し、美術



大原孫三郎

館（大原美術館）や科学研究所（①大原農業研究所②大原社会問題研究所③労働科学研究所）病院（倉敷中央病院）の創設など社会や教育などのためにも尽力した実業家である。

その中で、特に筆者が興味を持ったのは②大原社会問題研究所と③労働科学研究所である。大地主であり大企業の経営者でありながら、経済社会的格差の拡大によって労働運動や社会運動が頻発するようになった時代、孫三郎は地主と小作人、労働者と資本家の利害は一致する、従って共存共栄を目指さなくてはならないと考えた。

細井和喜蔵が著した「女工哀史」1925年（大正14年）よりも4年前に労働科学研究所1921年（大正10年）を設立した。

孫三郎は自ら経営する倉敷紡績の業務を次々に刷新した。千人以上の女子工員の寄宿舎の整備や改革、「飯場」制度の廃止等。非合理かつ非人道的な状況の禍根を断った。

経済性と倫理・道徳性の両立が重要である

ことを再認識してあらゆる改革を実践した。

「人間そのものがその人のすべての財産である。」という考え方が科学的・文化的に人間らしい幸福を追求するという視点が誰よりも強かったといえよう。

多くの企業は、職場で過労死、過労自殺が発生した場合にその原因に労働条件や労務管理との関係でとらえておらず、従業員の死を職場改善の教訓に活かせず遺族に対しても冷淡である。

一方、企業を監督すべき立場にある労働行政が十分に機能しないことも多く、この結果、過労死、過労自殺が発生しても真摯な原因追及が行われず、問題点がそのまま放置されてしまうことが多いのが実情である。

筆者も大手企業を定年退職した後、嘱託社員として働いたある企業でも、嘱託という雇用契約を悪用し正規の社員のごとくノルマを課し、労働を強化し賃金の引き下げを平気で言う経営者、監督者が存在するのも事実で

ある。

労働基準監督署に相談に伺ってもすべて「労基法でいう労働者ではないので、相談をお受けできません」と玄関払いである。

おわりに

現在の経営者に欠けるものは、経営者としての使命感、倫理感ではないだろうか？

ブラック企業、ブラックバイトという言葉がよく耳にするようになった昨今ではあるが、はたして何が原因なのであるか？

経営者が企業の利益を第一に優先してその結果、大切にしなければいけない従業員を優遇せず、ただ道具のごとく使い捨てる傾向が顕著である。

このような現状とは全く正反対の思想を持ち、実践した大原孫三郎こそが、良きお手本ではないだろうか。

〈参考文献〉

- ・大原孫三郎―善意と戦略の経営者
兼田麗子 中公新書
- ・大原孫三郎―地域創生を果たした社会事業家の魁
阿部武司 PHP研究所
- ・わしの眼は十年先が見える―大原孫三郎の生涯
城山三郎 新潮文庫
- ・大原孫三郎・總一郎研究 創刊号
公益財団法人有隣会

(放送大学「ほうゆう」誌より 2014年)



大原本邸の外観 (奥の白い建物)



大原本邸の内部

第5回 時事問題意見交換会

満州国の建国と崩壊

平成30年11月10日 木田 晴康

テーマ選定理由

●満州国の建国が後の大東亜戦争へと進んでいった主な原因なのではないのか？

●日本にとって満州国は絶対に必要であったのか？

●外国への侵略という意識は存在しなかったのか？

と言う素朴な疑問を解明したいと思ったのが選定の理由である。

①満州とは

そこは遼東半島突端の旅順から大連、奉天（現、海陽）長春（満州国首都の新京）、ハルピンに至るまで、ロシア帝国が極東の前線基

地として築いた町が点在するだけで、背後には雨後の竹の子のような満州族の地方軍閥が群雄割拠し、馬賊、匪賊が暗躍する広漠とした大地が無限に広がる無法地帯であった。長城の外に広がる塞外の地であり中原に住む漢民族からはさげすまされてきた土地であった。

明治38年（1904）9月4日、日露戦争に勝利した日本は、ロシアとポーツマス条約を締結。ロシアから、旅順や大連が位置する遼東半島先端部の租借権や、樺太の南半分などを得る。この時、ロシアが清国領土内に持っていた東清鉄道線の一部に当る、南部支線の長春と旅順を結ぶ部分も譲り受けた。

沿線の土地の権益も付いてきた。この鉄道および付随権益が、満鉄（南満州鉄道株式会社）のビジネスの出発点である。当然、政府主導で進められた。

満鉄の事業内容は、鉄道業の他に鉱業、水運業、電気業、倉庫業、土木事業、病院や教育事業、不動産業、その他政府の許可を受け

た営業の事業である。

② 満州国の成立

満州事変と石原莞爾

昭和6年（1931）9月18日柳条湖事件を機に関東軍は軍事行動に移り、奉天、長春、營口など、満州の主要部を占領。いわゆる、満州事変に突入。柳条湖事件と満州全土の制圧、そして満州国までのシナリオを書いたのが、天才的軍人として今日まで語り継がれる関東軍作戦主任参謀石原莞爾中佐である。

石原は陸軍大学校の戦史担当教官に着任。日蓮信仰と戦史研究が結合した彼の戦争哲学「世界最終戦論」はこのころ構想された。石原を満州事変へと導いた理論である。

石原は当初、上司の板垣征四郎大佐と共に満州領有計画を持っていたが最終的には領有案（満州を日本の領土にしようとした計画）を捨て、参謀本部が主張する独立国家樹立案に同調することになった。

昭和7年（1932）3月満州国建国宣言

愛新覺羅溥儀と土肥原賢二

満州国は、二つの国号を持った。国が建てられた昭和7年（1932）3月1日から9年2月までは共和国の満州国。同年3月から国が消滅した昭和20年8月18日までが君主制の満州国である。満州国の国家元首である執政を経て満州帝国の帝位に就き、康德帝を名乗ったのが、愛新覺羅溥儀である。彼は清朝最後の皇帝でラストエンペラーとして知られている。

満州国は、日本が強引に作り上げた傀儡国家ではなく、満州族が新たにできた国の帝位に就くことで欧米列強や国際社会の支持を得ようと画策したのが、関東軍司令部付きの奉天特務機関長、土肥原賢二大佐であった。満州国建国における謀略担当トップを務め、欧米からはアラビアのロレンスになぞらえて「満州のロレンス」とあだ名された人物である。

戦後はA級戦犯として処刑された。

初期の段階で不拡大方針を掲げていた軍中央は、独走を続ける関東軍と国民の熱狂にあおられて事態を追認した。政府も軍部の圧力に屈して、閣議で戦費の支出を認めることとした。

国際連盟は満州事変調査のため、イギリスのリットン卿を団長とする調査団を結成して満州に入るようになっていた。(リットン調査団) 板垣征四郎は本庄繁軍司令官らと計って、この調査団の満州入りの前に満州国建国という既成事実をつくった。

関東軍は「五族協和、王道楽土」を声高に叫び、民族融和の機関として協和会をつくった。しかし、実際は日本人の優位性が確立され、日本の植民地化が露骨に行われた。

当時の日本は、世界恐慌のどん底にあえいでいた。特に東北地方は冷害によって米作が大きな減収となり、娘の身売り騒ぎまで起きていた。生活の窮迫は農民ばかりでなく、全国の労働者や小さな自営業者にまでもおよんだ。

③満州国の崩壊

満州国は日本が太平洋戦争に完敗して降伏した日、昭和20年(1945)8月15日に消滅した。その6日前の8月9日午前0時ちょうど、ソ連軍は満ソ国境を一齐に突破して怒涛の侵攻を加えてきた。同時に、日本に対して宣戦布告してきた。

当時、日本とソ連は中立条約を結んでいたが、昭和20年4月、ソ連は条約の破棄を通告してきた。

中国東北部に忽然と出現した満州帝国は、皇帝溥儀が退位し、13年半の歴史に幕を下ろした。日本から約32万人もの人々が開拓移民として満州国に移り住んでいたが、多くの開拓民たちが戦争の終戦直前にソ満国境を越えて参戦したソ連軍に虐殺・虐待された。

終戦とともに日本人と中国人の立場も逆転し、それまで醜い仕打ちを受けていた中国人から報復されるケースも少なくなかった。かつて精鋭を誇った関東軍は、戦局悪化とともに

に南方へ転用され、弱体化していた。そこへソ連参戦となり、民間人も含めてシベリアへ強制連行された。関東軍に見放された開拓団のうち、約10万人が帰国できなかつたといわれる。

結語にかえて

軍国主義や大陸進出に進む世論一般に対して敢然と異を唱える知識人はいなかったのか。日露戦争から満州事変まで、一貫して反対してきた人は少数ではあるがいた。

私は、これらの戦争反対を唱えた知識人、学者、政治家たちの存在をもっと深く研究する価値があると思う。

満州国の建国に反対した人物の代表として石橋湛山がいる。

大陸に進出した日本は、満州を植民地にして中国をも支配しようとする「大日本主義」を目指すが、これに異を唱えて「小日本主義」

満州放棄論を唱える。彼の論調はこうである。

- ① 中国民族の反日感情は消えない
- ② 満州は価値を生み出さない
- ③ 植民地領有は軍事支出を増大させ、国家財政を圧迫する、結局国民生活を悪化させる
- ④ 米国等との対立を生み、日本の国際的孤立をもたらす
- ⑤ 民族主義の高揚で、植民地の分離独立は不可避である

他に、満州国成立に反対した人物として

矢内原忠雄（東京帝国大学教授） 辞職に追い込まれるが、戦後、東大総長

横田喜三郎（東京帝国大学教授）「売国教授」と非難されたが、戦後、最高裁判所長官

今回は、これらの詳細は割愛する。

参考図書

- 日米開戦の正体 孫崎 享 祥伝社
- 満州帝国50の謎 森山康平 ビジネス社
- 満州「どこにもない国」 加藤聖文 洋泉社
- 満州帝国史 太田尚樹 (株) 新人物往来社
- 図説満州帝国 太平洋戦争研究会 河出書房新社
- アジア・太平洋戦争 森 武麿 集英社

(放送大学「ほうゆう」誌より 2020年)

二宮尊徳と大原幽学の比較考察

木田 晴康

はじめに

江戸末期に、天災等により多くの荒廃した農村や幕藩領を救済した指導者であり農政家である二人に注目した。

奇しくも二人は同時代に活躍した人物であり、同じ儒教思想を吸収し、それぞれ独自の思想を打ち立て、しかも実践したが、その効果と結末はかなり相違していた。

筆者は両者の功績を多とするとともに、何が生涯の末路を分けたのかが知りたく思う。

その疑問を解消するために、両者の始末を記述する。

二宮尊徳について

二宮尊徳、通称金次郎は1787年足柄平野酒匂川中流の栢山(かやま)村(小田原市)

に農民の子として誕生。幼少時に二度の洪水で田畑を失い、14歳で父、16歳で母と死別して兄弟も離散、極貧に陥る。一時伯父の家に身を寄せ、農作業を手伝いながら勉学、自立に励み、荒れ地を開発、捨て苗木成から再建の極意を会得し、24歳で自家の再興を果たした。

その経験を生かし困窮する親族や仲間、小田原藩士、奉公先の家老の財政救済にも尽力その手腕が買われて36歳で小田原藩の、56歳で幕府の役人（武士）となる。1856年、日光今市の報徳役所にて70歳で没するまで、窮乏した600ヶ村を再生に導いた。

その手法は、科学的な実態調査と綿密な経理に基づく計画と実践力である。その基本には万物の長所（徳）を活用し伸ばす（報いる）とする思想があった。それは論語の「以德報徳（徳を以て徳に報いる）」にあると評されたことにより、尊徳はこれを「報徳」と称した。

その成果は、創意工夫による「勤労」、収入

の範囲で生活を図る「分度」、それから得られた蓄積を、自身の生活安定向上と仲間や社会への支援、新たな生産への投資にあてるための「推譲」、そしてそれを誠実に実践する「至誠」によって達成されるものであった。報徳は明治以後の近代社会においても、国民の自律的、共同的な生産活動や、企業の健全経営などにも多いに貢献してきた。

大原幽学について

大原幽学は、1797年尾張藩の家老の次男として生まれた。18歳の時、武芸修行中に相手を死亡させたことで、生家を勘当され、28年間もの流浪生活を重ねた。畿内・四国・中国・信濃と流浪し1835年名主の依頼で下総国香取郡長部村（千葉県旭市）を訪れた。21か国の遊歴先で4100人もの友人ができた。長部村の名主、遠藤伊兵衛に懇願されて定宿することになる。長部村は40軒あった家数が24軒に激減し荒廃に苦しんでいた。

働き手の戸主は放蕩の挙げ句、借金まみれになって出稼ぎに離村。遊興の味を覚えた若者達。家と村の荒廃は何とも仕様がなかった。乞われた幽学の農村指導は、まず、道徳的な生活を取り戻すことから始められた。幽学の説く性学（生理学）を学ぶ教団を組織化して「道友議定誓約」をさせ十か条の生活規範を成文化して厳守を求めた。

改心した道友が一致して先祖株組合（世界最初の農業協同組合）の田畑・基金を運用して村の復興をはかる手法であった。

幽学の農業指導の具体的な例として、年間の所要労働時間を見積もって農事予定を作成したり、水田耕作法で正条植と粗植の技術を導入したり、耕地整理、農家の住居移転等、無駄のない合理的で先進的な農業経営を実践した。

幽学の講釈に400人もの人が集まり、より大きな講釈場が必要となり、「改心楼」を建設した。人足や建設費用は門人の奉仕であり、

費用はすべて道友の寄進・奉仕でまかなわれた。

幽学が54歳の時、改心楼が完成し、順調に事業が進展していたが、それからわずか2年後、幕府の嫌疑を受けることになり、6年にも及ぶ裁判の結果、幽学に100日押込めの処分が下った。改心楼などの教導所は取り壊され、先祖株組合も解散させられた。

幽学は失意のうちに1858年3月、自害により62歳の生涯を閉じた。

以上、尊徳と幽学のそれぞれの生涯と農村指導における人づくりや暮らしの指導等を簡単に見てきた。

本文のテーマである両者の明暗を分けたものとは一体何であったのかを次に述べたい。

むすびに

筆者はまず二人の出自に注目した。

尊徳は農家の長男として生まれた。それゆえに、尊徳は農民の出身であることを自覚し、

終始藩主と共に荒廢した農村を復興した。

一方、幽学は尾張藩の家老の次男として生まれた。それゆえ、幽学は生涯武士として生きており、そのことが、農政改革に幕府の意向を臆することなく思い切った施策を次々に実行したのである。例えば、耕地の交換分合や農家の移転をふくんだ耕地の改良は領主の政治の根幹に属することである。一筆ごとに所在、種目、面積、所有者の名請け人が登録され、年貢収取の基本台帳となっている検地帳の内容を事実上変更し、共同財産制にしようとした点。これらは幕府の地方支配の原則に反することとなり、決して許されることではなかった。

さらに、幽学は18歳の時、武芸で相手を殺めており、そのことで父より生家を勘当され28年間の流浪生活を重ねた。それゆえに幽学は人別帳にはのらず、生涯無宿人となり、幕府評定所の裁判にも不利益となったと推定される。

幕末の疲弊した農業を復興させるために、両者は情熱を燃やしこの国に大いに貢献した。

同じ時代に生きた人物として、両者を比較することにどれほどの意義があるのかは定かではない。しかし、両者の天と地ほどの生涯の違いに納得できなかった。

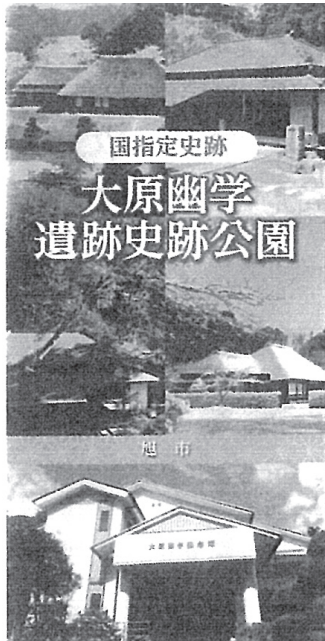
なお、二宮尊徳は小田原城内の報徳二宮神社に人神として祀られている。

大原幽学は「大原神社」として神社申請したが許可がおりなかった。

今後、両者については更に深く広く探求していきたいと思う。

〈参考文献〉

- 日本思想史事典 石田 一良 東京堂出版 2013年
日本思想全史 清水 正之 ちくま新書 2016年
二宮尊徳・大原幽学 奈良本 辰也 他編
岩波書店 1973年
大原幽学と幕末村落社会 高橋 敏
岩波書店 2005年



大原幽学遺蹟史跡公園
パンフレット



報徳博物館パンフレット

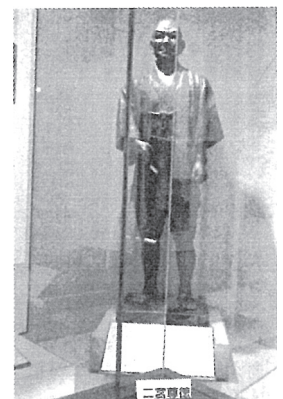
二宮尊徳の思想―大原幽学との比較を中心にして
姚 奇志 神戸女学院大学 2009年
土地所有史 五味 文彦 他編
山川出版社 2002年
百姓の力 渡辺 尚志 柏書房 2008年
〔香川の民俗〕より 2023年5月



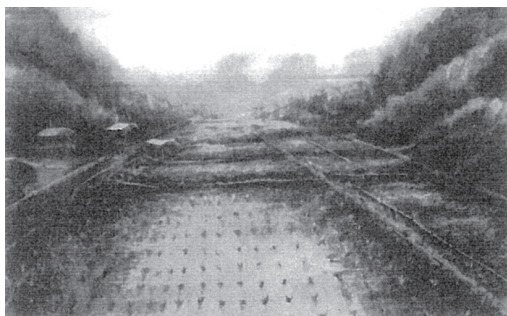
田んぼの近くに二軒を一組に移動イメージ図
(幽学記念館絵画資料)



大原幽学銅像
(同記念館)



二宮尊徳銅像
(同記念館)



正条植えのイメージ図 (幽学記念館絵画資料)

第7回 時事問題意見交換会

「山椒大夫」の私的考察

― 鷗外の真意は

2020年11月14日 木田 晴康

テーマ選定の理由

● 幼少の頃、読んだ「山椒大夫」の作者森鷗外は読者に何を伝えたかったのか鷗外の真意を考察したいと思ったから。

はじめに

文豪森鷗外の「山椒大夫」の物語は、誰しも幼少のころ、読んだ経験があると思う。安寿と厨子王の物語と言えば、記憶がよみがえるのではないだろうか。

鷗外はこの作品で、何を世に問いたかったのか。筆者はこの視点から、考察を試みることにしたい。

この小説は森鷗外の創作ではない。中世の終わりごろから近世にかけてはやった、「説経節」と呼ばれる芸能で、旅芸人のような者が節をつけて、さ・さ・ら・や・か・ねなどを伴奏にして民衆に語る大衆芸であった。「山椒大夫」は五説経の中で代表的な説教節のひとつであった。小説「山椒大夫」は、1915年（大正4年）1月『中央公論』の新年号に、鷗外の本名、森林太郎として発表している。

「中央公論」は文芸欄にも力を入れた雑誌であったが、政治色の濃いものであった。

筆者がまず注目したのは、この作品が発表された時代背景（タイミング）である。

医師である鷗外の専門は衛生学であった。ベルリンの留学も陸軍衛生制度及び軍隊衛生学研究であった。鷗外は本業の衛生学者としても多くの仕事をしており、1914年（大正3年）には「衛生新編」の五版を刊行している。その中で、不潔な居処や食事の栄養・さらに小児の労働や労働時間にまで及んだ労

働環境の改善の必要を説いている。

明治維新以降、我が国の国是となった「富国強兵」による急激な近代化は、日本の労働運動の草分けとして知られる「東洋モスリン事件」となって噴出した。1913年（大正2年）6月、〈東洋モスリン〉の職工2800人が食事と労働時間の改善を要求し、（ストライキ）を行う。

日本の工場法は、1897年（明治30年）に職工法が準備されたものの、女子や年少者の夜業の禁止に対して、綿糸紡績業者より猛烈な反発を受け、法案を撤回した。日本における最初の労働者保護立法であり、一見進歩的であったが内実は適用範囲を15人以上を使用する工場に限り、しかも、少年や少女に17時間労働を認めた完全に骨抜きにされたものであった。徹夜就業の禁止規定は施行後15年間の猶予を認め、施行は1916年（大正5年）にまで持ち越された。鷗外の「山椒大夫」の執筆・発表はこの間のことである。

工場法に反対する資本家たちが「損になることはわしも嫌じゃ」と言う山椒大夫に見えてくる。

紀田順一郎は「東京の下層社会」（1990年）で女工の悲劇の発端には常に人買いが介在する。募集人ないしは紹介人ともいわれた彼らは、その意味では現代におけるリクルートの役割を果たしていたといえようが、実態は限りなく人さらいや詐欺師に近い存在であったと述べている。「山椒大夫」の作品の中でも、一家の不運の発端となった直江の浦で、山岡大夫という人売りの名人の犠牲になったのである。

母と召使は佐渡へ売られ、安寿と厨子王の二人は舟に乗せられ、丹後・由良の湊へ送られそこで二人は由良の山椒大夫のもとで、奴婢（奴隷）として劣悪な環境のもとで強制的に働かされた。やがて、安寿と厨子王は苛酷な状況から脱出する計画を立て実行した。

二人は逃亡に成功はしたが、姉の安寿は逃

げきれないと覚悟し、山中の池に入水した。

厨子王は、途中の国分寺に逃げ込み、僧曇どん猛みょうりつ律師に助けられ、上京に成功し、関白師実の支援もあり、丹後の国守になる。

元の説経節では、国守となった正道（厨子王）は山椒大夫と三郎を穴を掘り埋めた後、竹の鋸で首を引かせて殺した。（復讐譚）

しかし鴟外はその出典とは違い、ことごとく、奴婢を開放して給料を払うことにした。大夫が家では、一時それを大きい損失のように思ったが、この時から農作も工匠の業も前にも増して盛んになって、一族はいよいよ富み栄えた。

鴟外はこの作品の中で、「奴隷制度」そのものには焦点を絞ってはいないが、暴力装置を背景とした強制労働よりは、労働者が自ら働く喜びを発見できる自由な労働の方が、効率が良く、生産性が上がることも予想していた。

おわりに

鴟外はこの「山椒大夫」という良く知られた作品の中で、世に何を問おうとしたのか。

(一) 人身売買という不条理

(二) 山椒大夫という分限者（富豪者）と奴婢という身分制度

(三) 莊園制度と明治・大正時代の土地制度の在り方

(四) 苛酷な労働条件と労働運動にみる労働問題

これらの社会問題こそが、鴟外が世に訴えたかったテーマではないだろうか。

作品が発表されたこの時代を振り返ってみよう。

検問と発禁が日常的に存在したことを考えれば、時の政治のまずさを直接ではなく、オブライトに包んで、鴟外は世の読者に伝えているのである。

鷗外の真意とは、正にこれらの証左ではないだろうか。

〈参考文献〉

- 『山椒大夫・高瀬舟』 森 鷗外 新潮文庫
- 『新訳 説経節・山椒大夫他』 伊藤妃呂美
- 『暴力の人類史（上）』
ステイブン・ピンカー 青土社
- 『身売りの日本史』 下重 清 吉川弘文館
- 『検閲と発禁』 水沢不二夫 森話社
- 『安寿姫草紙』 三田村信行 ポプラ社
- 『日本の伝説』 藤沢衛彦 河出書房新社
- 『山椒大夫伝説の研究』 酒向 信行
- 『東京の下層社会』 紀田順一郎 筑摩書房

（放送大学サークル発表）



安寿と厨子王

筑紫の国に流された父を尋ねて、母と共に越後を旅立った姉弟「安寿と厨子王」。旅の途中、人買いに取られ母は佐渡へ、姉弟は丹後由良の山椒大夫の所へと売られた。姉は命と引換えに弟を逃し、都に出た厨子王は丹後の国守となり悪人を成敗し盲目となった母と再会したという。

山椒大夫伝説の里「丹後由良」にはこの伝説に因んだ遺跡が点在している。

2020/03/26

第8回 時事問題意見交換会

私が大原幽学をとりあげた理由

2021年11月13日 木田 晴康

はじめに

大原幽学という人物を知ったのは、本サークルの例会であった。武士の身分でありながら荒廃した幕末の農村、農民の救済を実践指導した人物として強く印象に残ったからである。

大原幽学の生涯と彼の業績、そして、成しえなかった理由は何なのかを述べてみたい。

生涯と業績

大原幽学は尾張藩士の家に生まれたが、少年時代ある事件で父の勘当を受け、28年間もの流浪生活を重ねた。京・大阪を起点に西は四国の伊予、南は紀伊・熊野、北は丹波・丹後・但馬、東は美濃の17か国におよんだ。一転、

信州上田に滞在、江戸を経て海路房総の地に辿り着く。21か国の遊歴先で4100人もの友人ができた。

香取郡長部村（現・千葉県旭市）で名主、遠藤伊兵衛に懇願されて定宿することになる。

長部村は40軒あった家数が24軒に激減し荒廃に苦しんでいた。

働き手の戸主は放蕩の挙げ句、借金まみれになって出稼ぎに離村。遊興の味を覚えた若者たち。家と村の荒廃は何とも仕様がなかった。

乞われた幽学の農村指導は、まず、道徳的な生活を取り戻すことから始められた。幽学の説く性学（性理学）を学ぶ性学教団を組織化し「道友議定誓約」を契約させ10か条の生活規範を成文化して厳守を求めた。

道友中契約の事

- ① 博奕
- ② 不義密通
- ③ 諸勝負
- ④ 職工二重
- ⑤ 女郎買い
- ⑥ 強欲
- ⑦ 謀計
- ⑧ 大酒

⑨訴訟発頭 ⑩狂言或いは手踊り

浄瑠璃、長歌、三味線の類い、人の心を浮る所作

以上、博奕に始まる10か条は長部村が骨身にこたえたかつての惨状そのものである。御上に命ぜられて守るのではなく、道友が互いに議定の上自らが本心で厳守する。改心した道友が一致して先祖株組合の田畑・基金を運用して村の復興をはかる手法であった。

先祖株組合とは

(1) 組合の加入者は、所有地のうち金五両に相当する耕地を出資し、その耕地から生まれる利益を無期限に積み立てる。

(2) 出資者のなかで破産するものが出ても、原則として持ち分を分割しない。ただし一株分の元金が百両をこえたときは、加入者の合意によって半株分を割り渡して家を相続させる。残りの半株分はその家の持ち分とする。

(3) 性学の規約に違反して同門から破門され

ても、出資分はいつさい割り渡さない。

幽学の農業指導の具体的な例

(1) 年間所要労働時間を見積もって農事予定を作成した。

(2) 水田耕作法で正条植と粗植の技術を導入した。

(3) 耕地の交換分合や農家の移動をふくんだ耕地の改良をおこなった。

幽学はこれらの結果、年貢をきちんと納め、領主に救済を仰がず、村方騒動も起きないという、領主にとって誠にありがたい村作りを実践したのである。そのことは何らの反体制的要素は存在しなかった。

改心楼の建設

幽学の講釈に350人から400人もの人が集まり、おさまりきれなくなりより大きな講釈場が必要となった。24カ村延べ寄進人足4432人を動員して「改心楼」を建設した。

人足は門人の奉仕であり、長部村の工事現場に向かう他村の人足の動向は人々の眼に奇異に映った。

建設費用も448両にのぼった。費用はすべて道友の寄進・奉仕でまかなわれた。

関東取締出役の摘発

長部村の先祖株組合の復興事業も軌道に乗り、さらに性学教団もセンターの改心楼が完成してまさに順風満帆の幽学を、密かに関東取締出役の情報網が迫っていた。

幽学の教説・言動に疑心をいだいていた関東取締出役は、「二足のわらじ」をはく博徒らをそそのかして、幽学の本拠に暴れこませた。それをきっかけに幽学と門人たちは、関東取締出役の取調べを受け、出役から裁判権のある勘定所に移され、評定所の判決が出たのは足掛け6年後であった。

判決の内容

(1) 幽学本人は人別に加わらず長部村に永く居

住していたこと。

(2) 農民に不似合いな改心楼（性学教導所）の建築を指導したこと。

(3) それほどの学力もないのに独断的な教説を説いたこと。

(4) 領主の政治に属する百姓株・田畑などについて勝手な取り決めをし共同財産制にしようとしたこと。

これらは、不将であるから押込めに処するとの判決であった。そして改心楼などの教導所は取り壊され、幽学が門人たちと心血を注いで、結成した先祖株組合も解散させられた。押込みは100日が期限であったから、幽学は安政5年2月5日に放免されたが、それから一月たった3月7日の深更に、長部村の墓地である御塚丘にのぼって切腹して死んだ。享年62歳であった。生涯の情熱を傾けた事業がむなしく崩れ去ったことに絶望し、また、門人たちにかけて大きな迷惑に心を痛めたあげくの自決であったとみられている。

おわりに

これまで、大原幽学という人物と彼の業績を簡単に触れてきたが、幽学が生きた時代は天保の大飢饉があり、米価の騰貴による大一揆が頻発していた。農村・農民は全国的に厳しい生活を強いられていた。ゆえあつて諸国を遊歴した幽学であつたが、幕末の悲惨な村落社会の現状を少しずつでも改善せんと情熱を注いだのである。まず彼が着手したのは、人の生き方ともいえる性学（性理学）の教えである。天地の和、「性」を根源に家族・村落・領主の分相應の調和を説いた。神道、儒教、仏教を一体とする、独自の実践道徳である。

幕末の東総地域は、醤油・干鰯に代表される一大産業の隆盛をうけて、未曾有の好況に湧きたっていたが、反面、奢多と遊興に直面していた。この時、遊歴から遊説に転じ、村落復興運動に献身した。それらの運動はなんら反体制的要素は存在しなかつたにもかかわらず時の幕府は急激な性学運動発展に危機感

を持つたのではないかと思われる。一筆ごとに所在、種目、面積、所有者の名請け人が登録され、年貢収取の基本台帳となっている検地帳の内容を事実上変更することになる。幕府の地方支配の原則に反することになる。

現在の農業協同組合の元となつた先祖株組合は世界初の産業組合とも言われており、その評価は益々高まつている。

最後に、個人的には来春にもできれば「大原幽学記念館」にも訪問したいと思つている。さらに、同時代の代表的な農民指導者二宮尊徳とはどこがどうちがうのかも研究したいと思つている。

〈参考文献〉

日本の歴史18 幕藩制の苦悶 北島正文

中央公論社 1974年

大原幽学 中井信彦 吉川弘文館 1963年

大原幽学と幕末村落社会 改心楼始末記

高橋 敏 岩波書店 2005年

略年譜

年号	西暦	年齢	主な事蹟
寛政元年	1797	1	3月17日、尾張落(現名古屋)大道寺家の出と伝えられる
文化11年	1814	18	3月、生家を勸当され漂泊の生活が始まる
文政6年	1823	27	2月、近江国(現滋賀県)伊吹山松尾寺に寄寓し、住職提宗に学ぶ
天保元年	1830	34	3月、再び提宗和尚を訪ね、その激励をうけて社会運動の実践を決意
天保2年	1831	35	信州上田小諸で講義をし、門人が増える 8月、上田を去り江戸に向かい、その滞在後に浦賀から海路にて安房国(現千葉県)に入る
天保6年	1835	39	8月、名主遠藤伊兵衛の依頼で初めて長部村を訪れる
天保9年	1838	42	9月、長部村に先祖株組合を結成する
天保12年	1841	45	2月、長部村で土地の分合、耕地整理を行う
天保13年	1842	46	9月、遠藤伊兵衛ら幽学に住居の提供をする
嘉永元年	1848	52	2月、領主から模範村として表彰される
嘉永3年	1850	54	4月、門人増加にともない、教導所である改心楼が完成する
嘉永5年	1852	56	4月、関東取締出役の手先が改心楼に乱入する事件が起こり、これをきっかけに幽学の取り調べが始まる
安政4年	1857	61	10月、事件の判決が下り、幽掌は押込百日を言い渡される
安政5年	1858	62	3月8日未明、長部村の墓地で自刃を遂げる

大原幽学とその周辺	本村 礎編	1981年
大原幽学伝	タカクラ・テル	
美知書林		1949年
百姓の義	大野和興	
社会評論社		1990年
文学で読む日本の歴史	五味文彦	
山川出版社		2020年
相互扶助の経済	テツオ・ナジタ	
みずず書房		2015年
日本通史	近世5	
網野善彦他編集		
岩波書店		1995年
大原幽学と飯岡助五郎	高橋 敏	
山川出版社		2018年
千葉県の歴史	石井 進・宇野俊一編	
山川出版社		2000年
民俗学がわかる事典	新谷尚紀	
日本実業出版社		2001年
流域をたどる歴史3	関東編	
豊田 武他編	(株)ぎょうせい	1984年

(放送大学サークル発表)



幽学肖像画



幽学の家

「安藤昌益」を知っていますか？

2021年2月13日 発表者 木田晴康

はじめに

私が「安藤昌益」(1703～1762)を知ったのは、昨年の春頃で知人が香川大学名誉教授の村瀬裕也氏の著書「人文科学の擁護」を貸してくれたことに起因します。同書の中に、安藤昌益の平和思想⇨江戸期封建の最中に弧々の声をあげた「日本国憲法」の先駆⇨という章を読んで感銘(衝撃)を受けました。このことが「安藤昌益」の思想をもっと知りたいと思ったのが研究の動機です。

「安藤昌益とその思想」を世界中に伝えた人物は、GHQのカナダ代表部主席のハーバート・ノーマンというカナダ人でした。彼は外交官であるだけでなく「日本における近代国家の成立」などの業績を持つ著名な歴史学者であった。このノーマンこそが「忘れられた

思想家 安藤昌益のこと」を著している。

- ① 平和主義
 - ② 軍備全廃
 - ③ 人間の平等
 - ④ 男女同権
 - ⑤ 環境問題
- 等、卓越した見識を持つていた。

安藤昌益の主な著書「自然真営道」は1899年（明治32年）、当時、第一高等学校（現東京大学教養学部）校長であった狩野亮吉（かのうりようきち）博士が発見した。

社会を「法生」と「自然生」に区別して、前者には階級制度や貧富の差があり、不平等な社会である。後者は「万人直耕（すべての人が直接、田畑を耕すこと）を前提とし、自給自足をモットーとする社会であり、階級制度も貧富の差もなく、平等な社会であるとする。

昌益は「法生」について、みずから田畑を耕すこともせず百姓たちに寄生する貪欲な輩（武士や手工業者）が支配する社会であると指弾した。

彼はそうした輩を「不耕貧食の徒」と呼ん

でこれを否定し、彼らが支配する封建制を徹底的に批判した。

さらに、昌益は当時の学問にも矛先を向け、仏教や儒教、神道というものは「法生」を野放しにする学問であるとして非難し、聖人の教えとされるものでさえ、「自然世」を「法世」へと墮落させた張本人であるとした。

昌益の暮らしていた時代は、全国的に百姓一揆が頻発しており、地元の東北地方でも百姓たちは激しく困窮していたそのせい、昌益の思想は極めて反社会的・反封建的であり、彼の思想は当時の水準をはるかに超える先進的なものであった。

しかし、その急進的な過激さが災いして、彼の思想は当時の人々に全くといってよいほど影響力がなかった。彼はほぼ無名のままこの世を去った。

おわりに

私は、現代にも通じる安藤昌益の先進的な

思想をあらためて究明し、彼の真に伝えたかったことを更に研究しようと思う。今回の発表はあくまでも途中経過に過ぎず、今後じっくりと調査、研究したいと思う。

〈参考文献〉

- 人文科学の擁護 村瀬 裕也 本の泉社
- 東洋の平和思想 村瀬 裕也 青木書店
- 安藤昌益の世界 石渡 博明 草思社
- 安藤昌益の実像 山崎 庸男 農文協
- 日本思想史事典 石田 一良 石毛 忠 編集 東京堂出版
- 日本思想史 子安 宣邦 編集 人文書院
- 日本思想全史 清水 正之 筑摩書房
- 日本思想 稲田 義行 日本実業出版社

(放送大学サークル発表)

安藤昌益について

2022年10月8日 発表者 木田晴康

はじめに

安藤昌益は、江戸中期(1703～1762)に活躍した医者であり思想家であるが、同時代には江戸幕府には何ら影響を与えることはなかった。このことを押さえておく必要がある。

二宮尊徳や大原幽学は農民農村を指導、実践した。大塩平八郎は「救民」の旗をかかえ江戸幕府に対し乱を起こした。

安藤昌益の発見と経緯

1899年(明治32年)狩野亮吉が古書店で「自然真営道」を入手した。その後、約30年して岩波講座「世界思潮」に論文「安藤昌益」を発表、当時の社会事情や公職に携わる自らの立場を考えて発表を遅らせた。(内容が徹底

した反体制思想の為)

戦後、1950年駐日カナダ大使のハーバー・ト・ノーマンの手により「忘れられた思想家・安藤昌益のこと」が岩波書店より発刊され、周知の人物となり彼の研究が盛んになった。

安藤昌益の生涯

1703年現秋田県大館市の豪農の生まれ、1762年同地で没した。元服前後に京都に上り、仏門に入り禅を学び、妙心寺、北野天満宮で修業したが、仏教等の教えに疑問を持った後に八戸に帰り医者となった。

安藤昌益の思想

1753年刊行の「自然真営道」、「統道真伝」より

- 士農工商の身分階級差別を否定（封建的支配体制の否定）
- 男女平等を含む人間平等観
- 「直耕直織」の農民を基盤とした農本共産制

の提唱

○「不耕・貧食」の支配階級や武士、商人たちは農耕をせず消費のみをする。

○人間の「妄欲」による乱開発の結果、自然が災害を惹き起こし人間に報復する。（エコロジーの思想）

○仏教・神道・儒教（朱子学）の否定 これらの学問は封建制度を維持し、民衆を搾取する為に利用してきたに過ぎない。

○戦争・軍学の拒否、侵略戦争の批判（平和思想）

○「法世」とは支配階級が己の「不耕貧食」を維持するために捏造した恣意的な法体系のこと

○「自然世」とは万人が等しく「直耕直織」に従事し、平等な関係で相互に扶助しあう共同社会（農本共産制）

上記の主張は社会主義・共産主義・無政府主義（アナキズム）に通じる思想である。

おわりに

最初に述べたが、安藤昌益は彼が生きた時代には時の為政者である江戸幕府に対して何ら影響を与えてはいなかった。しかし、そのことが彼の業績を低く評価することにはならない。江戸幕府が誕生して百年後、ようやく幕藩体制が強い強固な国家が成立した。しかし同時に農民を中心にして貧民が増大し各地で一揆等が多発した。永い戦国時代を終え、江戸幕府の幕藩体制が盤石になったこの時代は同時に、この制度の矛盾が噴出し、何度も改革が試みられたが、いずれも根本的な解決には至らなかった。

安藤昌益は百年後に生まれていれば良かったと思う。あまりにも早く生まれたため、彼の思想は全く世に受け入れられなかった。安藤昌益の発見者である狩野亮吉も「自然真営道」の文章に触れた時、これは狂人の書いたものではないかと疑ったと伝えられている。あまりにも浮世離れした思想であり、当時の

民衆にも理解され支持されることもなかった。

当然、昌益の「転真敬会」は秘密結社であり、反体制思想として世に出ることはなかった。

「安藤昌益の思想」でも述べたが、彼の思想は現代でも相通じる民主主義の根源である平等の思想・平和の思想・エコロジーの思想等多くの示唆を与えている。

今後も安藤昌益の研究が益々盛んになり、彼の業績が顕彰されることを大いに願いたい。

以上

(放送大学サークル発表)

神仏習合と廃仏毀釈について

2023年11月11日 木田晴康

はじめに

このテーマに決めた理由は、数年前の四国新聞で、「獄門人形」の記事を見て興味を持ったからである。江戸時代の初期、私の故郷の金毘羅大権現で起こった神道と仏教の争いである。

詳しくは記事にゆずるとして、神仏習合時代の仏教が神道より優位の典型的な事件（事例）である。

神仏習合とは

神仏習合とは神仏混交とも言い、神道と仏教を調和融合する信仰で、奈良時代に始まり、1868年（明治元年）、神仏分離令により禁止された。

原神道：自然への信仰【自然の神々】と氏族【血

縁共同体】の祖神崇拜

仏教：人生の煩惱【欲望への固執】からの救済↓悟りによる心の平安

仏教の伝来

552年、百済の聖明王が欽明天皇へ仏像と経典を献上、欽明天皇は仏教の受容の選択を群臣に打診。蘇我氏は容認したが、物部氏は反対して対立。争いの結果、崇仏派の蘇我氏が勝利し、推古天皇の摂政として、聖徳太子が仏教を国家仏教として採用した。

以来、天武天皇による仏教保護政策により、仏法による国家守護が形成された。従来の伝統的な神道も仏教政策と並立し、天皇正史との関連も含め、天皇族の正当性を主張した。

王権と仏教との結びつきが、神仏習合のポイントではないかと私は思う。

廃仏毀釈とは

中世以来、仏・菩薩が衆生を救うために、

日本の神の姿を変えてこの世に現れたとする【本地垂迹説】が仏教の優位を示している。

しかし、1868年、明治新政府の神道国教化政策に依拠して行われた仏教排斥運動であり、神仏分離令の布告通達にともない、仏堂・仏像・仏具・経巻などに対して、各地で起こった破壊行為である。

その結果

江戸時代の人口 三千万人

寺院の数 九万カ寺↓四万五千カ寺

現在の人口 一億三千万人

寺院の数 七万七千カ寺

である。

結びにかえて

冒頭で述べた、金毘羅大権現の大スキャンダル、松太・権太の『獄門人形』から200年後に神社側が復権し、敗訴した金光院（松尾寺）と立場が逆転するとは誰も想像できな

いのではないか。

これまで幕府によって特権を与えられ、一部では墮落をしていた仏教界が、廃仏毀釈によって適正な数になり、社会における仏教の役割が明確になったのではないかとも思う。

以上の検討の結果、私の考えを述べたい。

①現代においても、神と仏は対立したものであるのではないと考える。むしろ、両者は融合することで互いの優れた点を認め合い、新たな神仏和合の可能性に期待したいし、習合と分離という歴史はあっても互いに消滅する事はないのは日本民族の賢明な選択ではないかと思う。

②地球温暖化時代における神道の自然信仰↓
自然環境保護に通じること

③個人主義（利己主義）の時代における仏の慈悲心↓他者への思いやり↓争いのない平和な

社会の実現

〈参考文献〉

日本仏教を捉え直す 末木 文美士 放送大学

2019

中世の神と仏 末木 文美士 山川出版

2021

廃仏毀釈 畑中 章宏 ちくま新書 2021

仏教抹殺 鶴飼 秀徳 文春新書 2021

十七条憲法 永崎 孝文 致知出版社 2021

日本の神様事典 川口 謙二 柏書房 2018

神社ガイド 岸川 雅範 成美堂出版 2021

お止橋 薄井八代子 高松市文化協会 1978

(第14回香川菊池寛賞)

(放送大学サークル発表)

こんぴらめかやり

獄門人形



権太

松太

先人たちの贈り物

木田 晴康

最近、ある歴史サークルで「神仏習合」を研究し発表した。神仏習合とは、神道と仏教が一体となることである。

日本人は自然の中に、人知を超えた霊力をみて「八百万の神」としてその神霊に畏怖を抱き祭祀を含めた信仰をしてきた。同時に、自分たちの祖先を敬い崇める祖先崇拜につながり、さらには地域氏族を守る神（氏神）への祀りを通じて、日本を統率する天皇を尊崇する天皇崇拜へと展開してきた。

昨今の地球温暖化に伴う、様々な自然災害や、地球環境の急激な悪化傾向に対する対策の重要なヒントが、この神道の思想の中にあるのではないかと思う。

一方、仏教は六世紀の半ば、百済の聖明王が欽明天皇へ仏像と経典を献上。欽明天皇は

仏教の受容の選択を群臣に打診。蘇我氏は容認したが、物部氏は反対して対立。争いの結果、崇仏派の蘇我氏が勝利し、推古天皇の摂政として聖徳太子が仏教を国家仏教として採用した。仏教は王権と結びつき、当初は国家擁護として形成されたが、やがて民衆にも信仰が広がっていった。

聖徳太子も「仏法を信じ、神道を尊ぶ」立場であり、決して両者を対立して受け入れたわけではなかった。

聖徳太子が制定した「十七条憲法」は、現代を生きる日本人の金科玉条ともいえる贈り物と思う。

とりわけ、第一条「和を以て貴しと為す」は有名であり、日本のみでなく、全世界に通用する名言であると思う。その意味するところは、人は皆〈和の精神〉を大切にし、不毛な争いが起こらないように、「共生き」の精神で支えあうことを第一にせよ。との意味である。

不幸なことに、現在、世界では各地で戦争が起こっており、兵士のみでなく、子供や非戦闘員である一般人が多数犠牲になっている。

仏教の「共生き」の精神が広く世界に広がってゆけば、戦争のない平和な世界が実現できるのではないだろうか。

先人たちの贈り物として、一つは私たちの住むかけがいのない地球（自然）を大切にすること

人類が恐れ多くも、自然を征服したような考えは、間違っても持つてはいけない。

この地球（自然）を大切に、後にく子孫の為にも、神道の考え方が我々に教えてくれる。

二つ目は、仏教の慈悲の心を持つこと。他人への思いやりを大切にすること。これらを実行することが、争いのない平和な社会の実現を可能にすると思う。

先人たちは、私たちに二つの崇高な贈り物を届けて下さった。感謝あるのみである。

神と仏は我々日本人にとって、かけがえない財産であると思う。日本人として古来より信仰してきた神と仏を、これからも生活の信条として、先人たちの贈り物として、しっかりと受け取り、私たちのできることを実行したいと思う。

（「香川の民俗」より 2024年1月31日）

第四部 その他随筆など

私のいじめ体験

木田 晴康

今から約六十年前、小学校五、六年生の頃のことです。

一つは、被害者になったこと。もう一つは、加害者になったことです。

前者は下校中に、一歳年少の生徒と一歳年長の生徒との二人組に腹を殴られました。

刃物をちらつかせて、「おまえは生意気だ」と言われて暴力を振るわれたのです。

私は彼らとの接点はなく、殴られる理由は全く不明でした。

一方的に殴られた事に腹を立て、帰宅して家族に話すと、同居していた五歳上の叔父が仕返しに行こうと言いました。私と叔父は現場に直行し二人を下駄でボコボコにしました。

その後は、彼らからも誰からもいじめの被害にあったことは一度もありません。

後者は、六年生の時、気の弱そうな男子生徒一人を数人の生徒が遊び半分で、教室内で胴上げしてそのまま床に落とすのです。

私も、当時は遊びだと考えて、いじめの認識はありませんでした。

しかし、被害に遭った生徒の親から、学校に抗議がありました。クラス担任の大池先生（男性）から叱責され、さらに罰として、平手で顔を叩かれました。関与した生徒数人の中に、私も含まれていました。私は直接生徒の胴上げには関わっていません。しかし、学級委員として、止める立場にありながら、傍観していた理由でした。

その時、私は先生の言われるとおりで素直に思いました。

当時、父がPTA会長をしていましたが、先生は、そんな事情を知りながら、私を特別扱いしませんでした。

私は他の生徒と同様に罰を受けたことを有り難く、うれしく思いました。

付度をしなかつた先生を尊敬しています。

現在も同じ考えです。

父もその話について、何も言わなかつたと記憶しています。

私は、理不尽なことは受け入れないという強い性格が形成されたと思います。

今も、いじめに遭い報復に立ち合ってくれた叔父には感謝しています。

後者の加害者の話では、数十年後に同窓会が開かれた時、大池先生にその件を話す機会がありました。良い指導をして頂いたことに感謝していますと伝えました。すると、先生は頭をかきながら、

「そんなこともあつたんですね」と照れておられました。

近くの町に住んでいながら、その後の先生の近況を知りません。

私の人生において、連帯責任ということ

教わつたことに感謝しています。

いじめの問題は、現在も減少するどころか、増加しています。昔はなかつた、パソコンや携帯電話等によるネットのいじめが新しく加わっているように思われます。

いじめの定義は簡単ではありませんが「虐待」と同じであるという認識が必要なのではないでしょうか。いじめる側は軽く考えていても、いじめられる側は心身ともに耐えられない苦痛を伴うものです。

誰しもいじめの被害者にはなりたくないと思うので、絶対に加害者にはならないことです。

現在、文科省もいじめ防止対策推進法を定めています。

この法律を効果的に運用する為にも、学校や教育委員会に任せるのではなく、第三者委員会を設置し、国が強力に指導する必要があると考えます。

(木もれび6号より 2022年)

福沢諭吉 著「幕末・維新論集」 を読んで

私の個人的な感想では、福沢諭吉の考えは正しいとは思わない。〈瘦我慢の説〉は福沢の独特の思想であり、現代では必ずしも世に受け入れられないと思う。

封建時代の象徴である徳川幕府の重臣である勝海舟と榎本武揚に対して、痛烈に批判しているのである。

その根拠は、明治新政府に敵対した立場にあったにもかかわらず、両者とも明治新政府の要人となった事である。勝海舟は軍艦奉行や後に陸軍総裁として幕府側のトップでありながら、西郷隆盛と会見して、江戸無血開城を実現した。すなわち、政府軍と戦わずして敗北したのである。

後に、明治新政府の海軍大輔や参議として要職に就いた。

榎本武揚も函館に立てこもり、政府軍に抵抗し降伏したが3年後に釈放されて、ロシア派遣特命全権大使、駐清特命全権公使、後に通信相、文相、外相、農商務相等を歴任した。

共に、徳川家の家臣たちの三河武士の気風（大義）があれば、リーダーとして責任をとるべきであると福沢は主張している。

数百年の間尊重されてきた武士道とも言われる精神に反し、それぞれの身の処し方は醜態であると言っている。

現代では、勝海舟が薩摩・長州等政府軍と最後まで戦わず、江戸を戦禍から守り、内乱による多くの人命を救い、対外国に対しても透きを与えなかったことは高く評価されている。

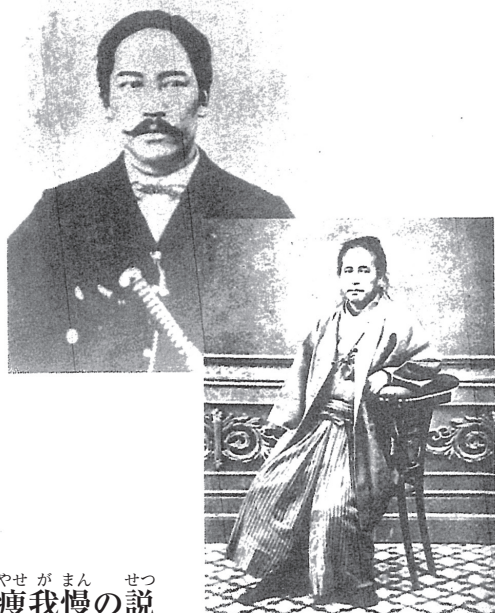
福沢は、勝氏の事業を軽いものとは思っていないと言いながら、武士としての大義名分を失ったほうが大きいと言っている。

明治新政府もかつて敵であった人物も、その能力が高ければ、政府の要人として採用せ

ずにいられなかったのか、又は、人材が不足していた結果なのかは分からない。

以上

(2023年12月5日)



やせがまん せつ
瘦我慢の説

(下) 勝海舟 (1823—1899) (上) 榎本武揚 (1836—1908)
写真提供：共同通信社、北海道大学附属図書館

映画「福田村事件」を観て

木田 晴康

今からちようど、百年前の一九二三年九月一日に関東大震災が発生した。その五日後、千葉県福田村（現在の野田市）で、香川県から来た行商人ら九人（幼児や妊婦を含む）が地震後の混乱の中で、話さぬき弁を理解できず、朝鮮人だと誤信されて虐殺されたのが「福田村事件」である。

彼らはなぜ殺されたのか、村人たちはなぜ彼らを殺したのか。歴史の闇に葬られていた実話に基づいた映画である。

映画は、殺された側の売薬行商団一行の生業を坦々と描き、一方の殺した側の福田村の村人たちの生活を様々な問題を抱えた群像劇として進行してゆく。さらに、この事件を世間に報じるマスコミとして地元の新聞社（ラジオはまだ無かった）と記者の葛藤も同時に

展開する。

この時代の背景として、一九一〇年八月より日本は韓国を併合しており、日本の植民地支配からの独立を求める大衆的な示威運動が多発していた。「不逞朝鮮人」として、彼らを差別し「井戸に毒」「放火・略奪・強姦」と恐怖心を煽り、攻撃を促したのは時の政府であり、新聞だった。

大正デモクラシーの芽生えも随所に見られるが、社会主義者やストライキ等の労働運動の指導者はことごとく弾圧された。反戦的な思想は、非国民とされ、軍（憲兵隊）や警察に検挙され、拷問や殺害が頻繁に行われた。

「福田村事件」の前後には、「亀戸事件」や「甘粕事件」といった大事件が発生しており、この時代が暗黒の世情であったことを物語っている。

だがこの映画の主なテーマは、軍国主義を批判することではなく、関東大震災後の流言やデマにより、朝鮮人、中国人らの虐殺が相

次いだことである。

震災発生後、政府は関東一円に戒厳令を施行した。戒厳令とは、国の権力が危機に瀕した時、民衆の権利を最小限に制約するもので、「立法・行政・司法」のすべてをまたは一部を軍の機関にゆだねることである。

戒厳令を政府が発出したことにより、国民は、在郷軍人・消防団・青年団を中心に、自警団を組織し、「殺してもいい」というお墨付きを与えられ、堂々と殺すことができたのである。

凶器として、刀剣・木刀・竹槍・鳶口・銃等が使用された。

普段は善良な国民が、自分や家族や平和な村が襲撃されると知らされたら、彼らは殺人者と変貌するのである。

この映画は、百年も前の昔の物語であるが、フェイクニュース等、誤った情報が氾濫する時代を生きる我々への警鐘である。

（木もれび8号より 2024年）

国際秩序と国連改革の必要

発表者 木田 晴康

はじめに このテーマを取り上げた理由

2022年2月に始まったロシア・ウクライナ戦争について、2年8か月経過した現在も、戦争は継続している。戦争を終わらせることは出来ないのか？国連の機能を回復させるにはどうしたら良いのか？皆さんと意見を交換したいからです。

(一) 揺らぐ国際秩序

2022年2月24日に始まった「特別軍事作戦」という名の「プーチンの戦争」が世界を震撼させている。

ロシアによるウクライナへの侵略は、ウクライナの主権と領土一体性を侵害し、武力の行使を禁ずる国際連合憲章を含む国際法の深刻な違反である。

ウクライナ各地において、ロシアによる残

虐で非人道的な行為が明らかになっているが多数の無実の民間人の殺害は重大な国際人道法違反、戦争犯罪であり、断じて許すことはできない。

国際刑事裁判所（ICC 赤根智子所長）はロシアのプーチン大統領や側近に、ウクライナ侵攻をめぐる戦争犯罪容疑で逮捕状を出している。

しかし、2024年9月締約国のモンゴルがプーチン大統領を逮捕せずに、訪問を受け入れた。

(二) 国連改革の必要

国際連合は第2次大戦の「連合国」の戦争理念に基づき、主としてアメリカの構想に従って1945年10月24日に設立された。

同時に、「国際連合憲章」が紛争の平和的解決等、前文及び19章111箇条を明記している。

国連の組織として、「総会」と「安全保障理事会」という主要機関がある。（他の機関は割愛する）周知のように、安全保障理事会（安

保理)を構成する15の加盟国のうち常任理事国である、中国、フランス、ロシア、イギリス、アメリカの1ヵ国でも反対すれば何も決められない。これが「拒否権」である。

1945年4月25日～6月26日の全連合会による「サンフランシスコ会議」が基礎となり安保理の表決方式は同年のヤルタ会議で常任理事国の一つソ連(ロシア)の強力な圧力により「拒否権」を決める形で決着した。

先の明石康国連事務次長が「拒否権」の特権を持つ5大国が、まさか他国を侵攻することはないだろうという期待と展望が前提としてあつたことを言明している。

この「拒否権」の行使のために、現在、世界中が切望している戦争を止めることが出来ないのである。

79年前に『二度と戦争を引き起こさない』という崇高な理想は、皮肉にも自ら墓穴を掘ったことになったのである。

【国連の機能不全】【常任理事国の拒否権の

乱用】の問題を解決する方法は無いのか？

① 国連に代わる民主主義国で構成する、いわば、「第二の国連」を創設する。

② ロシアは国連加盟国や常任理事国の適格を欠いているので、資格停止や除名処分にする。

③ 既存のG7の枠組みを發展させ、常設の事務局を設置して恒常的に活動できる国際機関へと改組する。

④ 法的拘束力がない現行の【総会】の権限を大幅に付与し、総会の3分の2の多数で【拒否権】を無効とする。

いずれも困難が伴うことは承知しているが、何もしない現状を変えることは喫緊の課題であること。

日本国の政府はこの行き詰まった国際情勢の改善に、是非とも貢献してもらおうように切に望むところである。

以上

(放送大学サークル発表 2024年10月)

あとがき

自分史に代えて―と銘打ったこの文集は、筆者の永年の願望であった。

おおむね、既に発表された文章・写真などであるが、掲載させてもらったことに、あらためて謝辞を述べたい。

一部、新聞掲載等のテーマと重複する小論もあるが、字数制限がなく、より深く考察した文を掲載したので、お断りしておきたい。

同時に、長期間に渡って親切にご指導して頂いた弘栄社のスタッフの皆様には感謝したいと思います。



木田^{きだ}晴康^{はるやす}

1947年（昭和22年）

現・琴平町生まれ

香川県立丸亀高等学校卒業

神奈川大学経済学部卒業

2007年 香川銀行定年退職

香川民俗学会会員

現住所

香川県仲多度郡まんのう町四條九三五―二